姫街道案内資料

「見付から御油へ」

三ヶ日町佐久米　　象鳴き坂

平成２４年１１月改訂

◎姫街道の名称

一般に「姫街道」と呼んでいる名称は，古代の文献では「二見道」，江戸時代の公文書では「本坂通」と記され，姫街道の名称は使われていなかった。名称の由来については，諸説ある。

○女性が多く通行した街道＝「ひめ」街道説

理由として，①新居関所の厳しい取り調べを避けるため。
②東海道の危険な今切れの渡しを避けるため。
③今切れという不吉な言葉を嫌ったため。

の３つがある。しかし，本坂通にも気賀関所での取り締まりがあったこと，本坂峠や引佐峠の険しい山道があったこと，東海道に比べて本坂通では２里以上遠くなることなどから根拠に乏しい。「今切」の地名は中世の大津波による浜名湖口決壊に由来するもので，近世になってこの言葉を忌み嫌うようになったとは考えがたい。

○「ひなびた」「ひねた」街道＝「ひね」街道説

江戸幕府による五街道の整備後は徐々に衰退して「ひなびた」街道となり，また「ひねた」（古い）街道となった。そして「ひね」街道が訛って「ひめ」街道となった。

○本道としての東海道と脇往還としての本坂通の関係から生まれたとする説

男性が主，女性が従という考えから，地元民が本街道である東海道を男性，脇街道である本坂通を女性に見立てて「ひめ」街道と称するようになった。中山道の脇街道である下仁田街道も「女街道」「信州姫街道」と呼ばれている。

○複合的な要因から生まれたとする説

「姫街道」は明治以降の造語ではなく，少なくとも幕末期に「女道」「御姫様海道」などと呼ばれていた。「姫」をはじめとする女性が多く利用したこと，脇往還である本坂通に女性名称を付したこと，その両者の複合的な関係が原因とし，明治以降になって「姫街道」呼称に統一された。

（「姫街道展」による）

＊姫街道」と呼ばれるようになった時期については，次ページを参照のこと。

◎姫街道の道筋

姫街道（本坂通）は東海道の脇往還である。江戸時代には，

○安間新田から市野宿を経て三方原追分へ至り，気賀宿に通じる道筋
○浜松宿から三方原追分へ至り，気賀宿に向かう道筋
○嵩山宿を経て吉田宿，あるいは御油宿追分で東海道と合流する道筋

があった。これ以外に，

○見付宿から池田の渡しを経て市野宿へ通じる道筋（池田近道）

があった。この道筋は中世以前の主要ルートであったと考えられている。

延宝８年（１６８０）頃描かれた「浜松領分絵図」には，「本坂通」の文字が市野宿付近などに記載されている。江戸時代初期には，安間起点から市野宿を経て気賀宿へ向かう道筋が本坂通であった。しかし，明和元年（１７６４）には，本坂通が道中奉行の管轄下に置かれて，東海道の付属街道とされた。この段階では本坂通は，浜松宿から気賀宿を通り，御油宿に至る道筋であった。江戸時代の中頃には浜松宿の発展により，主要な道筋が浜松宿起点の道筋に移り，市野宿は早くにさびれた。

（「姫街道を歩く」による）

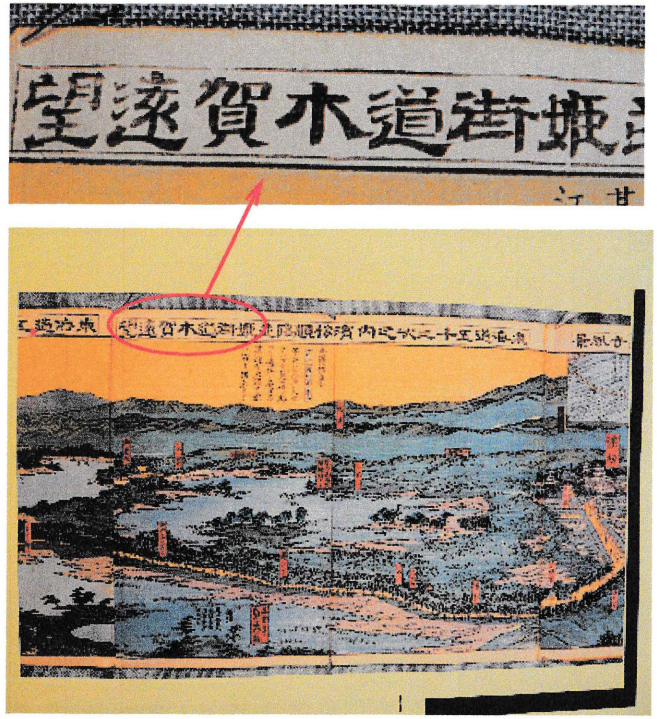
○作成について

・本案内資料は，見付宿～池田近道～安間～市野宿～気賀宿～三ヶ日宿～嵩山宿～御油宿の道筋について作成した。
・史跡や案内の写真は，全て現地で撮影した。
・地図は，明治２３年大日本帝国陸地測量部が測量した二万分の一の地図をもとにし，国土地理院「電子国土ポータル」を活用して作成した。

○案内資料の作成には，姫街道を歩き，説明板や地元の人の話，次の文献を参考にした。

・静岡県歴史の道「姫街道」　静岡県教育委員会
・姫街道を歩く　浜松市
・姫街道展　豊橋市桜ヶ丘ミュージアム
・写真紀行「姫街道」　神谷昌志
・豊田町誌　豊田町誌編纂委員会

○作成者　太田隆雄　浜松市浜北区寺島８１６
ＴＥＬ０５３－５８７－３０６３
○作成日　平成２２年７月１０日



（羽衣出版「東海道五十三駅勝景」より）

○「姫街道」と呼ばれるようになった時期について

＊　**嘉永３年（１８５０）**尾州大宝　長尾治右衛門が発行した秋葉山参詣道程図には，「本坂海道俗ニ**御姫様街道**ト云」と記されている。

＊　**嘉永７年（１８５４）**　中泉代官であった林伊太郎（鶴梁）の日記には，「長良村ヲ過ギ，是ヨリ吉田へ道アリ，所謂**姫街道**ナリ」と記されている。

＊　**安政２年（１８５５）**幕末の志士　清川八郎が旅の帰路，姫街道を利用しており，その旅日記「西遊草」には，「昨年よりして大名も新井を通らず，まま此処より上下するありとぞ。すべて**御姫様街道**と名づけて，格別難儀にもあらざる道なり」と記している。

＊　**万延元年（１８６０）**に制作された五雲亭貞秀の版画「東海道五十三駅勝景」に「東海道五十三次之内濱松順路並**姫街道**木賀遠望」とある。

従って，１９世紀半ばには「姫街道」と呼ばれ，一般化していた可能性があると思われる。

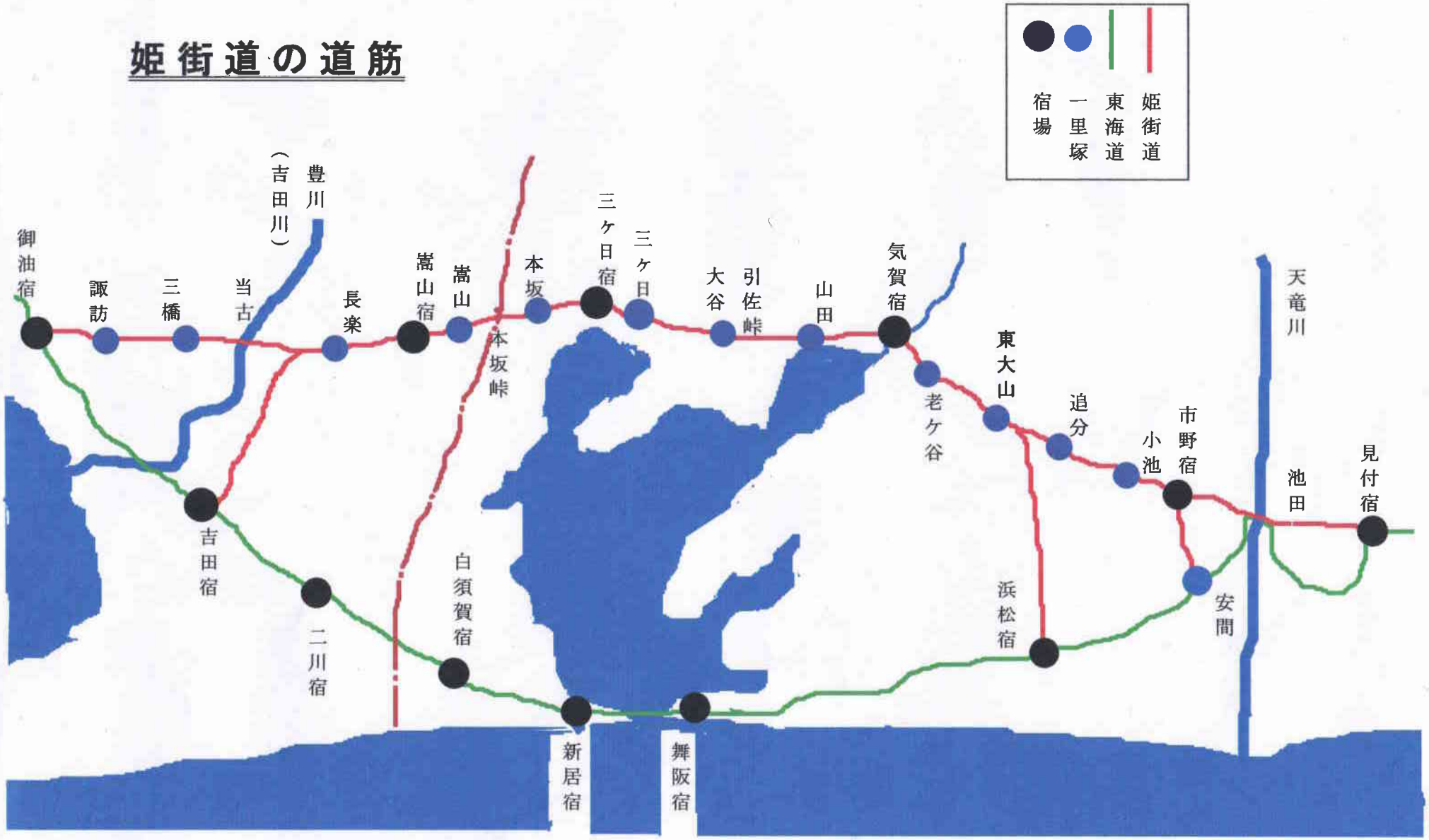
資料「日本年歴一覧」
二川宿本陣資料館蔵

享保十四年
交趾国より
貢献する所の
大象ハ惣身
灰色にして
頭の長二尺七寸
鼻の長四尺
胴の長七尺四寸
背高サ
五尺
といふ
是
日本へ
象のわたりし
はじめ也

今やひく
ふしの
裾野の
かたつふり
宗鑑

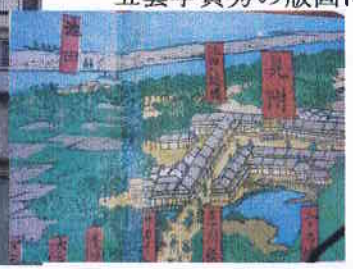
（太田　解読）

姫街道の道筋


宿場
一里塚
東海道
姫街道
御油宿
諏訪
三橋
当古
豊川
（吉田川）
長楽
嵩山宿
嵩山
本坂
本坂峠
三ヶ日宿
三ヶ日
大谷
引佐峠
山田
気賀宿
老ケ谷
東大山
追分
小池
市野宿
天竜川
池田
見付宿
安間
浜松宿
吉田宿
二川宿
白須賀宿
新居宿
舞阪宿

1　見付宿池田近道起点

見付宿の西端の角で東海道は南に折れて中泉に向かうが，池田への近道は角をまっすぐ西に入る。一般には池田の近道として利用されていたが，「本坂通宿村大概帳」では旅人の通行は禁止されていた。池田まで約４㎞，東海道より約３㎞近くなる。



五雲亭貞秀の版画には「池田近道」が描かれている。また，十辺舎一九の「東海道中膝栗毛」には，弥二郎は近道，北八は東海道を通って池田で待ち合わせたことが記されている。

2　秋葉常夜灯

正面に「秋葉山」「河原町」，裏には「元治二年歳乙丑春壬正月」と記されている。現在，灯籠には電灯が灯る。

左右に分かれた右の急な坂を上ると，かぶと塚公園前に出る。

3　兜塚古墳

かぶと塚公園内の直径８０ｍ，高さ８ｍの円墳で，三神三獣鏡・仿製鏡・勾玉・管玉・刀剣等が出土。武田軍との戦いで徳川方の本多平八郎忠勝が，この塚の松の木に兜をかけたという伝説からこの名がある。旧静岡大学農学部の敷地内で戦時中には中部１２９部隊があり，防空壕とされたため，原形は壊れている。

ここから警察署まで進み，国道一号線に出て，しばらく進むと歩道橋があり，その右手の旧道に入る。

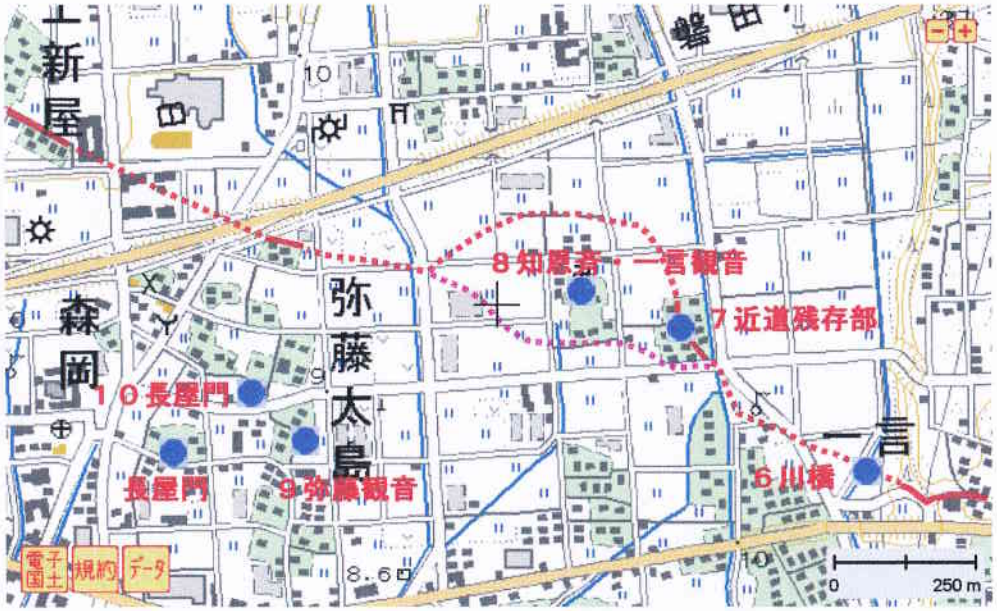
4　立場跡

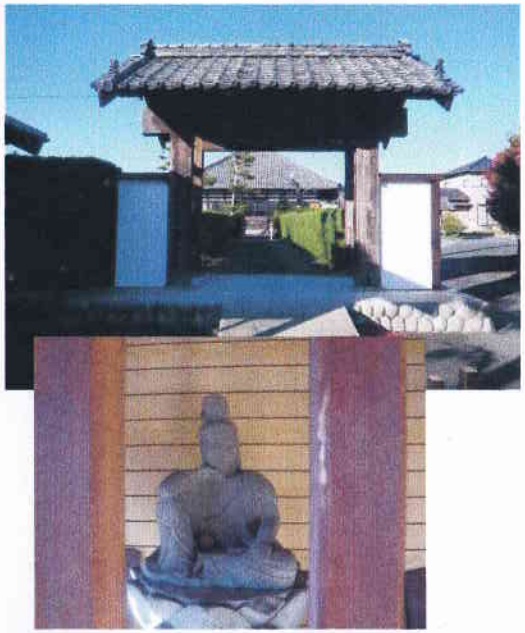
比較的新しい秋葉常夜灯があり，この常夜灯から少し先あたりまでの間に立場があったという。

5　一言坂

元亀三年の「一言坂の戦い」の場所と言われている。武田軍と戦い敗走する徳川軍を退却させ，救ったのが本多平八郎忠勝である。敵の武田軍もこの武勇をたたえ，「家康に過ぎたるものふたつあり。唐の頭に本多平八」と書いた札を磐田市国府台に立てたといわれている。南側国道一号線沿いに「一言坂の戦跡」の石碑がある。

現在の一言坂は途中から新しい道路になっている。坂の下から池田まで，旧道はごく一部を除いて消滅している。





8　知恩寺・一言観音

知恩寺の山門は，皆川陣屋門を移転したものという。山門は簡素なものであるが，門柱は一尺余りの堅固なものである。「一言十景」には，この寺の付近を旅人が通行している風景が描かれている。

一言観音は，一言坂から移されて山門西側観音堂に祀られている。朝日観音ともいい，馬の病気に霊験があるという。

武田信玄との戦いに敗れた徳川家康が，一生に一度だけ願いが叶えられるというこの観音に，戦勝の一言を願ったといわれている。

6　一言坂下の川橋

池田村の名主等から中泉代官に宛てた「差上申一札之事」に，見付宿の西はずれにある作場道（池田近道）の通り抜けを往来の旅人は禁止されていたが，作道の田の中に板橋を掛けて通行の者から百姓共が賃銭を取ることがあるので，今後は仰せ付けを堅く守ることを述べている。

その場所は確認できないが，現在一言坂の下に用水があり，狩野友甫の「一言十景」では知恩寺前にも小川があったようだ。

7　近道残存部

近道は時により変化し，知恩寺の裏側を通る道筋（天保４年頃の絵図）と，表側を通る道筋（江戸時代の年代不詳の絵図や明治２２年の地図）があったようだ。斉藤唯男氏宅東側の細道は，幅２ｍ弱，長さ１０ｍ程昔のままであったという。

9　弥藤観音

享保頃に始まる見付を中心とした観世音菩薩豊田三十三か所霊場の第二十三番札所の如意輪観音。

遠方からの参詣者も多い。いぼとり観音として有名である。

１０　長屋門

弥藤太島知行の旗本堀三左衛門の庄屋（鈴木家）の長屋門である。門に張られている説明では，二人扶持・給人格・先持槍御免の格式で地頭所の許可を得て嘉永三年に建築したものという。

また，付近には熊岡家の長屋門もある。

（鈴木家）

（熊岡家）

＜Ｐ２　一言付近の追加＞

○京見塚古墳

５世紀中頃に造られた直径４７ｍ，高さ７．５ｍの円墳で，磐田原台地西端の天竜川流域を見下ろす崖上にある。墳丘北側の周濠外堤部には埴輪焼成窯跡があり，濠内や墳丘面から埴輪が発見されている。

不治の病を得てこの地に住んだ戒成皇子（桓武天皇の第４皇子）が塚の上から京を偲んだため，「京見塚」と呼ばれるようになったという。石碑には「衣手の　なみだに空も　はれやらで　都のかたは　白雲ぞたつ」という歌が刻まれ，裏に由来が記されている。

一帯には弥生時代の方形周溝墓や古墳時代後期の群集墳があり，公園となっている。

○水汲坂と禁酒地蔵

京見塚の西下に水汲坂がある。旧一言坂との説もあり，坂下の水田で道路の形に敷石が発見されたという。

坂の途中に禁酒地蔵があり，御詠歌が掲げられている。

○皆川陣屋跡

皆川歌之助の陣屋跡で，皆川氏は一言村・西之島村・勾坂村・中村・下岡田村の計１８００石余の旗本であった。陣屋門は現在知恩斉の山門として移転されている。

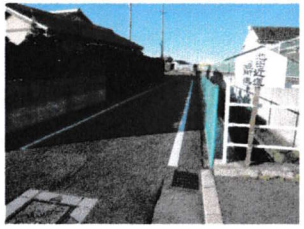
○池田近道残存部

地元の人の話では，近道は知恩斉から上新屋の秋葉燈に向かってほぼ西北に通じていて，バイパスに突き当たる手前の山岡・宮島宅の裏に幅１ｍ位の道が残っているという。

バイパスに向かって

バイパス側から見て

バイパスの下をぬけ，豊田図書館の交差点の西にある細道に入り，旧道を北西に向かうと昔のおもかげを残す上新屋の集落である。



１１　秋葉御神燈

四つ角に，「秋葉神社御神燈」（大正十年四月二十日）と彫られた石柱の上に，新しく金属製で作り直され，電球が付けられている。

○上新屋の観音堂

中央に如意輪観音（延享２年），左に青面金剛像（寛延元年，庚申塔，台座に三猿の彫刻），右に地蔵像がある。

四つ角を西へ進み，集落を抜けると，新屋ポケットパークがある。碑に熊野御前の物語の一場面（逢瀬の場）が書かれている。

１２　行興寺・熊野塚

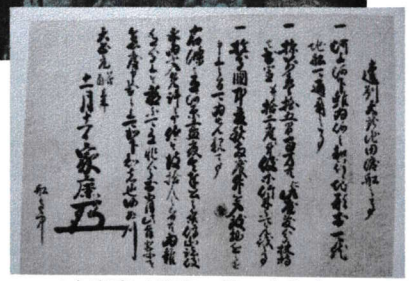
熊野御前が母の供養に建てた庵に，正応３年（１２９０）時宗遊行派真教上人を招いて開山とした。本尊は十一面観世音（恵心僧都作）。平宗盛に寵愛された熊野とその母の墓がある。

境内には，熊野御前が植え愛でたといわれる藤があり，「熊野の長藤」として天然記念物に指定されている。

１３　杉田屋

代々池田地方の百姓代であり，天竜奥の木材を江戸へ積み出し，酒造業や名物のどじょう汁も商っていた。

現在は菓子店を開いている。主人が創作した「ふじもなか」は，あんが藤色で珍しい。



（大庭亮二氏蔵，磐田市指定文化財）

（豊橋市二川宿本陣資料館蔵）

１４　池田渡船場跡

池田村は武田軍に追われた家康を渡船させ，無事に浜松へ帰城させて以来，「遠州天竜池田渡船之事」の家康判物により渡船の特権を与えられた。大天竜川は池田村持，小天竜川は船越村と隔日に分担となっていた。

渡船場は上・中・下の三カ所あり，水量が増し急流になると上が利用されたが，一般には下の渡船場が利用された。歌川広重の「東海道五十三次之内見附」（保永堂版）では，中州で一服している二人の船頭の様子が描かれている。

明治に入り，天竜川に橋が架けられたことにともない，その役割を終えた。

＜迂回路は，約１ｋｍ南の新天竜川橋の歩道を渡り，中野町に至る＞

１５　渡船場

西岸の渡船場は上・中・下の３か所あったが，その遺構は全く残っていない。姫街道に出るには，大部分の旅人は中野町村を通り，安間新田村から北上する道筋を進んだ。渡船場近くに高札場があった。この辺りの堤には太平洋戦争前まで松並木が残っていた。

１６　船橋之記の碑

明治天皇が初めて東京に行幸した明治元年１０月。天竜の渡河にあたって急遽流れのあるところに船橋を架けた。長さ１２４間，幅３間，船の数７８艘と記録されている。それを記念し，明治２９年１月に碑が建立された。

明治７年には船橋と木橋からなる橋ができ，明治９年１２月に完全な木橋に架け替えられた。

船橋の架橋を担当した浅野茂平の功績をたたえ，紀功碑が中野町の東海道沿いに建てられている。

また，船橋之記の碑の北側に並んで玉座迹の碑がある。明治１１年１１月１日，明治天皇が地方巡幸の時，ここにあった治河協力社に駐駕した。このとき代表であった金原明善が拝謁した。

１７　松林寺

臨済宗方広寺派の巨刹。境内の医王堂（薬師堂）は，徳川家光が浜松城主に命じて建立させた。本尊は薬師瑠璃光如来。代々の将軍が自ら信仰した。

寺は元禄と享保の２度にわたり炎上したが，この堂だけが焼失をまぬがれ現存している。

１８　萱場の高札場跡

中野町村には渡船高札場があったが，萱場（かやんば）には一般の高札場があった。同位置に屋敷を構えていた小池家の口碑によると，天竜川を渡河した大名たちが，ここで小休息をとったという。

現在，中野町南自治会によるよい町づくりのための住民五ケ条が掲げられていている。

１９　金原明善生家

金原明善（１８３２～１９２３）は天竜川の治山治水事業に尽力した人物である。生家は周囲を黒板塀で囲まれ，母屋と蔵が残る。母屋は江戸後期の建物で慶応２年に増改築され，瓦葺きになつた。

現在，生家は改修され，博物館として公開されている。（月曜・祝日は休館）

○松林寺　　ＮＯ．１７の追加

奥山方広寺の開山無文元選禅師（後醍醐天皇の皇子）がこの地に足を運んだ折に，草庵を建てて禅師を迎えたとされ，その草庵がやがて松林寺になったといわれる臨済宗方広寺派の禅刹である。本尊は地蔵菩薩。

参道の東側には鎮守である奥山半僧坊大権現が祀られている。正面の石柱は，「奥山半僧□」「明治十六年四□」と刻まれている。また境内には医王堂の薬師瑠璃光如来の他，延命地蔵尊，子育地蔵尊，十王像，庚申様なども祀られている。

２０　安間起点

姫街道の起点として東海道と分岐し，北上する。起点付近は道幅が狭いまま残されている。

この分岐点にはもと「(従是)鳳来寺道」，側面に「ほうらいじ」と記された道標が据えられていた。上部が欠損している。

現在は西にある天竜公民館の敷地に移されている。

この鳳来寺への道は姫街道を通り，途中から伊奈街道に合流する道筋である。

２１　安間一里塚

起点の西には，江戸から６４番目の東海道安間一里塚があったが，現存しない。北側の塚の一部は道路敷になっている。「大概帳」によると，左右の塚の上に榎が植えられていた。この一里塚は，姫街道と東海道の共用の一里塚で，姫街道の小池一里塚は，ここより一里の地点に置かれている。

２２　千体堂（普伝院内）・半僧坊里程石

天竜川沿いの戦いで討ち死 にした徳川・武田両勢の将士 を供養するため，村人の浄財で千体の木彫仏を安置した堂宇を建立したと伝えられている。もと姫街道沿いの東側にあった堂宇は現存せず，現在は普伝院の小堂に移され，安置されている。木彫仏は高さ１５～２０ｃｍの小さな像である。

また，境内には姫街道沿いにあった里程石が移されている。「奥山半僧坊道　是ヨリ六里□□」「明治十九年五月建之　安□□□　安□□□」と刻まれている。

２３　安間家跡

安間家は安間新田村の名主を務め，代々七郎左衛門を襲名している。東海道や姫街道に接し，街道の往来にもかかわりあいをもっていた。「安間新田村安間家覚書」には，寛永３年７月将軍家光上洛に付き本坂通（姫街道）修繕の記録がある。

現在安間家の跡地は，浜松市に寄付され，始祖了願に因み「了願公園」となっている。

２４　道標

姫街道沿いの東側民家の角地の植え込み内にある。正面に「右笠井　秋葉山　左市野気賀　金指道」左側面に「嘉永元申年三月」と記されている。右側面には建立者九名の名が刻まれている。

２５　半僧坊里程石

奥山半僧坊までの距離を刻んだ石である。正面に「五里廿六町」，右下に「長上郡下石田村」と刻まれている。姫街道は奥山半僧坊への参拝道の一部となっており，三方原追分までの間にかなりの数の里程石がある。明治初期から中期にかけて建立された。

この北にも「五里廿五丁」の里程石が以前あったが，地元の人の話では宅地造成で行方不明となっているという。

２６　長泉庵

街道沿いに秋葉常夜灯があり，駐車場の奥へ入ったところが本堂である。馬頭観音が安置されている。もとは境内の観音堂に安置されていた。地域住民の信仰を集め，初午の日には馬を連れて参拝に訪れる人も多かったという。本堂の脇には新しい馬頭神供養塔も建てられている。

また，本堂手前右に，「嘉永五年二月初午」に奉納された手洗い鉢がある。

秋葉常夜灯は大正１２年１月に建立された。

２７　道標

明治１６年に天竜川に架かる池田橋ができ，池田橋から真西に姫街道に至る道が整備され，この道標が建てられた。「右奥山　半僧坊気賀　金指 道」，「左池田橋新道　見付　中泉近道」「明治十六年七月建之」と記されている。

現在下石田の八幡宮境内の公会堂の裏にあるが，元は池田道分岐点の角地にあった。

２８　池田道分岐点

天竜川東岸の池田へとつながっていた「池田道」との分岐点である。

明治１６年に池田村と富田村（現白鳥町）の間に木橋が架けられ，この橋の西岸と姫街道を最短で結んだ。また，分岐点には道標が建てられた。（現在下石田の八幡宮境内の公会堂裏にある。）

分岐点から東へ５００ｍ程度までは旧道の面影が残っているが，その東は浜松インターチェンジや倉庫群によって失われている。

＜下石田の追加＞

庚申堂

○半僧坊里程石と芭蕉句碑

池田道の一本北側の細道に庚申堂があり，その横に半僧坊里程石と芭蕉句碑が建てられている。

里程石には「五里弐拾町」と刻まれている。佐藤賢治郎と小池孫治郎が建立した。もとはすぐ近くの池田道に建てられていた。

また横の石碑には，「芭蕉翁　草臥れて宿かるころや藤の花」と刻まれている。下石田の俳人小池古心などによって建立されたものと推測されている。

○　半僧坊里程石

下石田北交差点より東３００ｍのＪＡＦ事務所の角に里程石がある。「五里廿七町」「明治十八年四月建之」「長上郡下石田村　上西組有志連」と刻まれている。隣接の鈴木文雄氏が，土地改良の時，北東２００ｍ位の池田道にあったものをここに移したという。

○　うすさま（げんぺいの石神様）

姫街道沿いの小さな堂に２つの石が祀られている。一つには「大日如来」と刻まれている。天竜川の氾濫によりこの地に流れ着いたものという。もう一つは銘文のない石である。下石田町有志が手厚く祀っている。祭礼は９月１３日。

〈言い伝え〉

昔、姫街道を旅していた高貴な方が京へ向かう途中、この地で亡くなり、お供の者が地蔵尊を建て供養した。しかし、天竜川の河原だったので、度重なる洪水でお地蔵様は川底に沈んでしまった。

江戸時代のころ、近くを流れていた「げんぺい川」で洗濯したり汚れ物を流していたところ、怪我や病気の人が続出した。そして村人が川の中から石の神様を見つけ拾い上げて丁寧にお祀りすると、災難がなくなったという。

○半僧坊道の道標　（R1.10.21 追加）

姫街道の市野東の枡形になっている所、旧笠井街道との分岐点に道標が平成３０年１１月に復元されている。道標は明治時代の建立当初のものである。

正面に「奥山半僧坊道」「右　金さし　平口ふどう」「（左）きが　金さし」「明治十八年四月建之」と刻まれている。

下部の文字は判読が難しいが、説明板によると市野村の６名の名が記されている。

元は市野宿西端の枡形付近にあったものという。

２９　宗安寺

宗安寺は市野氏の菩提寺である。境内には市野惣太夫家をはじめとする市野氏累代の墓塔が祀られている。墓塔には装飾宝篋印塔をはじめとする様々な形式のものが見られる。

市野氏は惣太夫真久の時，徳川家康に仕え，慶長５年に遠江国の代官となり，同９年に市野村に屋敷地を賜ったという。その後，代官職と惣太夫の名は，実次・実利・真防と受け継がれ，四代にわたり，９０年間この地にあった。屋敷は宗安寺西南１００ｍ付近にあったとされる。

３０　市野宿

宿場の面影はほとんど失われているが，古い旅館や石造りの蔵がわずかに残っている。また，宿の東に「東宿」，中央に「中宿」，西の新しく家並みがつくられたところに「新丁」という小字名が残る。宿場としては，江戸時代後期には衰退し，浜松宿から気賀宿への道筋が主流となっていった。

宿場全体が大きな枡形を形成しており，西と東に枡形が残っている。また，姫街道は安間川の東で笠井街道と合流し，東の枡形を越え，西の枡形で浜松方面へ向かう笠井街道と分岐している。

西の枡形

東の枡形

３１　半僧坊里程石

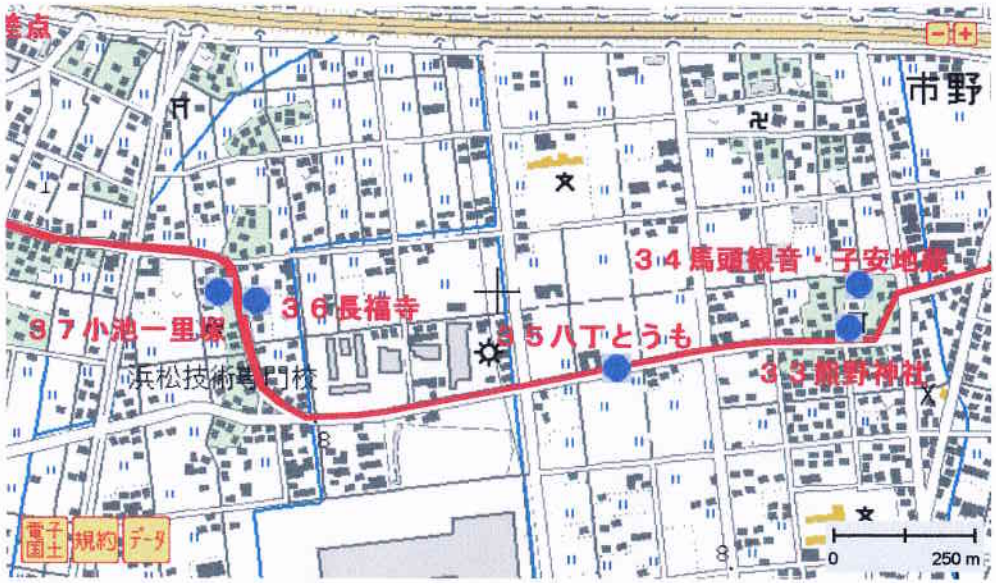
本陣跡の東２０ｍの角地にあり，「奥山半僧坊五里十四町」「明治十八年四月建之」「長上郡市野村村田要太郎」とある。

本陣は，近世中期から後期に代々西の斉藤家（現在の木下家）が勤めた。当時の建物は明治時代に火災で焼失し現存しない。

３２　半僧坊里程石

市野宿の西端近くにある。「半僧坊五里十一丁」，左下に「左平口不動道」と刻まれる。建立年月は不明。

本来は，西側の平口不動道との分岐点にあったが，道路拡幅に伴って現在地に移動したという。



３３　熊野神社

江戸時代には熊野三社大権現と称され，真言宗正福寺（現在廃寺）もあった。

境内に秋葉常夜灯があり，「秋葉山夜燈」「宝暦十庚辰十一月」と銘がある。姫街道沿いの常夜灯の内では年代的に古いものの一つである。最近火袋が復元された。また，すぐ側に「経塚」「郷中」と刻んだ石がある。由緒不詳。建立年月も不明。いずれも市野宿西はずれに建てられていたが，道路拡幅で現在地に移された。

境内東側（正福寺跡）に，高さ約４ｍの大きな宝篋印塔がある。方形部の四面に銘文がある。延享３年に浅羽一色村の金原氏が建立したものである。

３４　馬頭観音・子安地蔵

市野町南公民館の北側に小祠があり，馬頭観音（右）と子安地蔵が祀られている。

馬頭観音はもと熊野神社西方２００ｍの姫街道沿いにあった。台座の正面に「享保十年」の銘がある。道中の安全を願ったものと考えられる。子安地蔵も姫街道沿いにあったといわれ，「寛保三年」の銘がある。

３５　八丁とうも

「とうも」は水の張られた田面のことで，市野村の西はずれから小池村に至る田んぼの中の一本道である。姫街道のうち，遠江側では最も長い畷である。吹きっさらしのとうもの往来の安全のため，途中に観音の石仏が安置されていたことから，「観音とうも」とも呼ばれた。

３６　長福寺

延宝４年，独湛和尚の法子である天瑞和尚が開創された黄檗宗の寺院である。入口右手に六地蔵がある。奥に古い六地蔵，手前に新しい六地蔵か置かれている。

延宝８年の「浜松領分絵図」には，「曽我寺」と記され，背後に「曽我松」といわれる大樹が描かれている。

本堂西側の墓地の奥に，第二代住職，北堂和尚の墓がある。円形石板を縦に起こした独特の形である。風化が進み，刻字は読めない。北堂和尚は，この地方に木綿の栽培を普及させた功績で知られる。

３７　小池一里塚

江戸から６５番目の一里塚である。「浜松領分絵図」に街道の左右に塚が描かれているが，現存しない。現在「小池一里塚」と記された石碑が建てられている。

この付近には「一里山」という小字名が残っている。

小池一里塚を過ぎ，姫街道は左（西）に曲がる。そこから４００ｍ程進むと，右手に曲がっているが，姫街道はほぼ正面の細い道に入り，大養院の南側に進む。

大養院の西の江原橋から遠鉄自動車学校前駅の北側に至る約５００ｍは，工場や住宅地となり，完全に消滅している。

３８　秋葉常夜灯

以前，大養院南側に秋葉常夜灯・鞘堂が建てられていたという。現在のものは，昭和になってから同じ位置に復元されたものである。

鞘堂の内部には，現在灯明台が安置されている。

３９　高林家住宅

高林家は，近世を通じ，浜松藩の大庄屋（独礼庄屋）を務めた。

４代目の忠勝は行政面で，８代目の方朗は国学者として文化面で力で発揮した。１４代目の兵衛は民芸運動に参加し，邸内の旧主屋を建て替え，柳宗悦らによる民芸運動の拠点として「日本民芸美術館」を開いた。

屋敷入口には江戸期の長屋門が建つ。享和３年（１８０３）方朗によって建てられた。

４０　旧秋葉街道交差点

姫街道と小松方面に向かう旧秋葉街道との分岐点である。この地点から西へ約３０ｍまでの区間は，姫街道と秋葉街道が重複しており，そこから浜松方面へ向かう秋葉街道が分岐していた。

小松方面との分岐点の道南には道標がある。正面に「左　あきはみち」右面に「天明六年」と刻まれ，上部の文字が欠損し，下部の文字は土に埋もれている。

４１　半僧坊里程石

姫街道沿いに有玉村の里程石がいくつか設置されている。石材や文字の記入方法が共通しているものが多い。同時期（明治１９年頃）の建立である。

①四里廿六丁

②四里廿四町

③四里廿壱丁

④四里廿丁

⑤四里十九町

＜Ｐ９　有玉付近の追加＞

○　有玉神社

高林家住宅の西隣にある。明治４０年に郷社神明宮を村社八幡宮境内に移し，俊光将軍社など１１社を合祀して，郷社有玉神社とした。現在，有玉神社の社殿と俊光将軍社の社殿が並ぶ。有玉神社には，４００年前家康が愛馬を寄進したことに始まるといわれる流鏑馬が例祭の神事として伝わる。また，宇藤坂を上り北に入った所に，もと俊光将軍を祀った俊光霊社跡がある。

天竜川右岸には有玉伝説がある。坂上田村麻呂が蝦夷征討の折，舟岡山に陣を置いた。そこで大蛇の化身である美女との間に子（俊光将軍）をもうけた。ところが大蛇は正体を見られたため，子供と玉を残して海へもどった。後に田村麻呂と俊光将軍が蝦夷征討へ向かう際に袖ヶ浦（天竜川）が荒れていたので玉を投げ入れたところ，潮が引いて陸となったという。玉を投げ入れた地に建てられたというのが有玉村八幡社である。

俊光将軍社

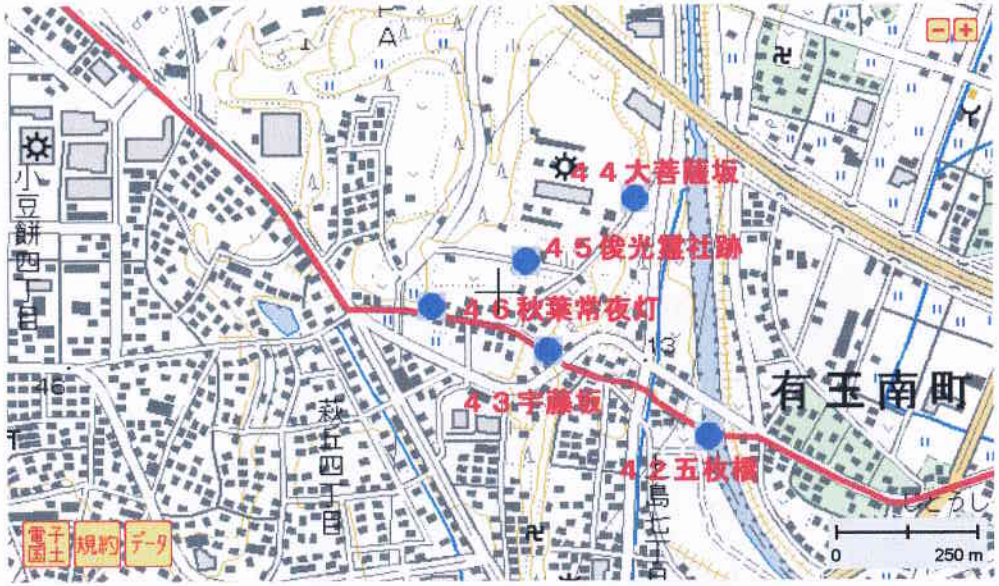
有玉神社

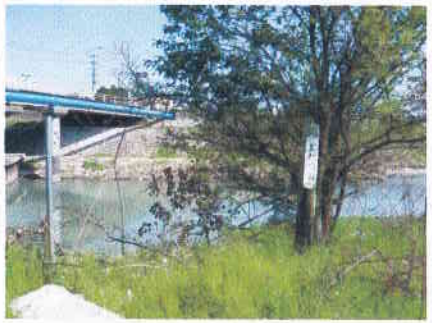
○　白華寺（はっかじ）

山号は赤池山。もと真言宗光福院。明治期に黄檗宗白華寺となる。入口の石段右側に「史蹟俊光将軍誕生之旧蹟」，左側に「旧跡江間加賀守平時成之墓江間殿松」の石柱がある。本堂右側には俊光将軍の産湯に使ったと伝わる赤池がある。江間加賀守は曳馬城主飯尾連龍の家老で本堂裏手に墓と松がある。

赤池

江間加賀守の墓と江間殿松





４２　五枚橋

四里十九町の半僧坊里程石から左手の旧道を進むが，馬込川の堤防に突き当たる。現在の橋の下流約５０ｍに五枚橋があった。大きな石の上に５枚の板を渡した橋であったという。現在の橋を渡って左手の土手を下ると，木柱が建てられている。 ここから西にかけて旧道が約７００ｍ程残っている。

４３　宇藤坂

五枚橋の西の旧道を進むと坂道になり，現道にぶつかる。階段を上ると，正面に旧道の坂がある。

杉浦国頭の「曳馬拾遺」に「うとふ坂」の記事があり，「本坂の大路にして，有玉の村より三方か原に登る坂をいふなり。」と記され，「浜松領分絵図」にも「宇藤坂」の名がみえる。

４４　大菩薩坂

元亀３年１２月の三方原合戦の際に，武田信玄が欠下城南側の大菩薩坂を上り，大菩薩山に陣を構えたと記録されている。

「浜松御在城記」に「信玄遠州に在陣（中略）二俣ヨリ三方ヶ原へ推出シ，大菩薩ニ陣取，刑部エ引人之処…」とある。

４５　俊光霊社跡

「浜松領分絵図」には「年光将軍」と記され，鳥居が描かれている。明治４０年に有玉神社に合祀され，現在は小さな祠がある。坂上田村麻呂伝説にからむ古社である。

発掘調査でかつての社殿跡の礎石列が出土し，さらに奈良・平安時代の掘立柱建物跡も八棟見つかった。古代の官道である本坂通に関連した役所が存在したことが伺える貴重な遺跡である。

入口には句碑「吹きされて月も氷るか山の月　烏玉」が建つ。

４６　秋葉常夜灯

欠下平公会堂から西約４０ｍの旧道沿いにあり，鞘堂内部の常夜灯は，木製脚の上に瓦器の火袋が置かれている。

４７　道標

高さ１．２ｍの大きな石の正面に「右きがかなさし　左庄内道」，裏面に「天保三年建立」と刻まれた道標である。浜松市域の姫街道沿いに今も残る道標の中では最も古い。ここは姫街道と庄内道の分岐点であり，姫街道の二重坂を上ると三方原台地である。

○　半僧坊里程石（道標）

老人福祉センターの隣にある中川貞夫氏宅の庭に自然石の半僧坊里程石が置かれている。「半僧坊道　右　四里拾七丁□□道　（左）四里七丁□□道」「明治十八年四月建之」長上郡下石田村の人の建立である。元は中川氏宅前の姫街道と中道との分岐点に建てられていた。中道は明治２年に幕臣が三方原に入植する際に，ここから大谷坂上まで造られた。右は金指，左は気賀を通る道筋を示していると思われる。

４８　千人塚古墳群

静岡県立三方原学園内に５世紀後半から６世紀前半にかけて築かれた９基の古墳（前方後円墳３基，円墳６基）が分布する。この古墳群は，天竜川右岸地域を支配した豪族一族の墓と見られる。

千人塚古墳

瓢箪塚古墳

千人塚古墳は，５世紀中頃に築かれた径４９ｍ，高さ７．２ｍの円墳で，長さ９ｍの造り出し部を持つ。墳丘面に葺石を貼り，埴輪を配してあった。円墳としては，浜松市内で最大の規模で，短甲や大刀，剣など豊富な鉄製品が出土した。三方原合戦にちなんだ千人塚伝説により名が付いているが，学問的な根拠はない。

瓢箪塚古墳は，全長４５ｍ，後円部径２ｍ，高さ４．７ｍの前方後円墳で，後円部に木炭槨３基があった。中からくつわの鏡板，大刀や鉄製品が出土している。墳丘面には葺石や埴輪が認められる。形が瓢箪に似ているところから名がつけられた。

４９　追分一里塚

江戸より６６里目，安間より２里目にあたる一里塚。「浜松領分絵図」には左右の一里塚が描かれている。大正後期まで左右の塚ともに残存していたが，現在は左（南側）のみ残っている。塚の高さ１．５ｍ，直径４ｍ。

近代に入って数本の松樹が植えられている。

５０　三方原追分

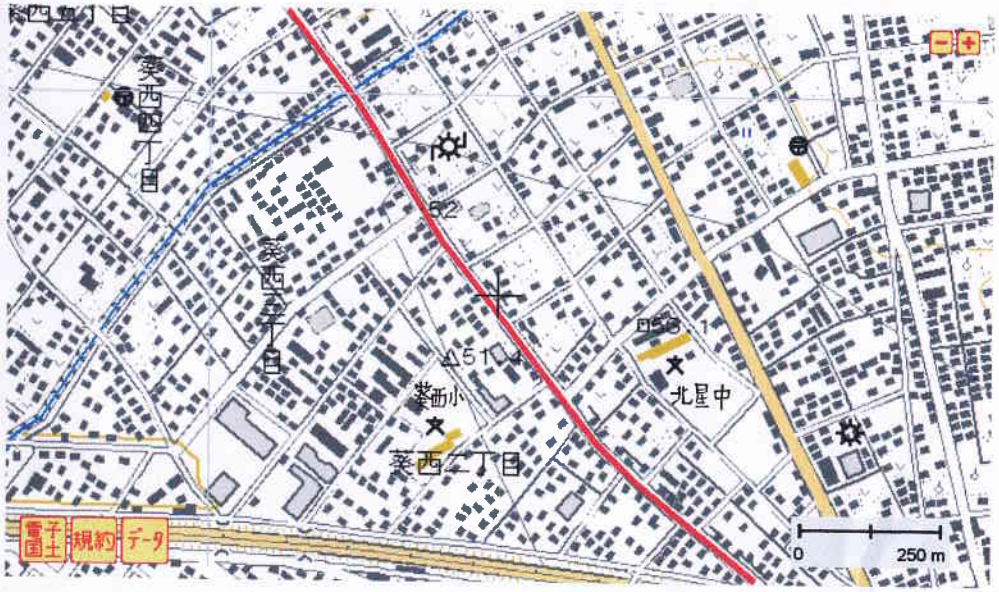
安間起点と浜松宿起点の姫街道の両道筋が合流し，ここから松並木のある左方向へ進むと気賀宿へ向かう。右方向へ進むと金指，奥山半僧坊，鳳来寺へと至る金指街道である。かつては都田道もここから分岐していた。「旅籠町兵右衛門記録」には「追分三辻」とある。

現交差点の交通島内には，二基の道標がある。

一つは「右みやこだ　中かなさし　左きが　道」と刻まれた慶応４年の道標である。もう一つは正面に「奥山半僧坊大権現へ三里廿九丁」右側面に「都田滝沢道」と刻まれていて，明治３７年美濃国土岐郡の人の寄付により建てられた。いずれも元の位置から移動している。

５１　松並木

姫街道沿いに残る唯一の松並木である。松並木は冬には寒風を防ぎ，夏は日陰となった。「浜松領分絵図」には，追分を中心に三方向の姫街道に松並木が記載されている。現在は約３．８ｋｍに松並木が残る。東側の松は，昭和２７年に焼失した三方原小学校校舎の再建費用のために伐採された。



５２　三方原神社

三方原神社は，大正１１年に浜松城跡より東照宮を勧進したもので，昭和３１年に改称された。

社殿東の不動尊には４基の道標がある。中央右の不動明王の光背に「右はま松道」「左いけ田道」と刻まれている。中央左の地蔵菩薩の光背に「右ハかなさしほうらいじ」「左ハけが三ヶ日」と刻まれている。いずれも元は姫街道や金指街道，赤松道の分岐点にあったものと思われる。

境内には，百里園創設者の気賀林の「気賀三富翁之碑」や三方原開拓ノ碑」など，数々の石碑が建てられている。

境内北西には扶持米倉庫跡がある。三方原に入植した士族の扶持米支給の倉庫として建てられた。扶持米は一人一日５合で毎月日を決めて支給されたが，明治６年に家禄返還制度ができ，支給は打ち切りとなった。その後，この倉庫は御倉会所や戸籍調所など名称を変更して利用されたが，取り壊しの時期は不明である。

５３　士族屋敷跡

明治の初め，およそ８００戸の士族が入植したが，農業は成功せず，まもなくほとんどが離散し，屋敷もなくなった。三方原神社の北西に唯一の屋敷跡が残る。西側の土塁は削られたが，他の箇所は残る。入口も東側中央にあったが，南側に変えられ，石垣による補強が見られる。

５４　精鎮塚

三方原の戦いの戦死者を弔うために建てられたという。もとは姫街道沿いの権七商店の２００ｍ程北西にあったが，大正年間に本乗寺に移築された。現在は，慰霊のため盆供養と１２月２５日のそば供養が行われている。

５５　気賀林屋敷跡

気賀林は，百里園経営など三方原開拓に尽力した人物である。気賀町出身で三方原開拓掛となり，明治２年から４年にかけて士族の入植事業に尽力した。明治７年から官民合わせて１００町歩の茶園（百里園）を開墾し，明治１２年には製茶が始められた。気賀林は，この地に屋敷を構え，事業の指揮をとっていた。長屋門は昭和５８年に解体され，袋井市の油山寺に門扉のみが保存されている。

５６　三方原救貧院跡

気賀林が生活の困窮にあえぐ入植士族や庶民の生活を救うために，明治１０年に設立した。建物は間口８間，奥行き３間半，木造平屋建て，瓦葺きで，当時４家族ほどを収容し，米麦・味噌・醤油・薪炭等現物支給の方法で救助した。気賀林没後は，横田保に受け継がれ，明治３５年頃まで続けられた。

５７　権七店

追分からこの付近まで松並木が続いているが，ほとんど家がなかったという。権七店は明治１９年に創業。１００年以上も続き，近隣の人々の寄合所となり，社交の場でもあった。店先には山桃の木があり，馬方は牛馬をつないで休憩した。店では駄菓子・団子・お酒等を売っていた。

元の権七店跡

現在の権七商店

元の権七店は，現在の権七商店の北にあり，現在アパートになっている。

現在の店の女主人は，当時の話をしてくれたり当時の仕入鑑札や小売免許状を見せてくれた。

西側の一里塚

東側の一里塚

５８　東大山一里塚

江戸から６７番目，安間より３里目の一里塚。西側の塚はほぼ原形のまま残され，東側の塚は復元されている。天保１４年の「東海道宿村大概帳」には，西側の塚には榎が植えられ，東側の塚には木がなかったと記されている。

西側には現在馬頭観音を祀る祠が建てられている。江戸時代に行き倒れになった人と馬の霊を祀るという。

○　江川永脩屋敷跡

江川太郎左衛門の一族で，江戸幕府の陸軍鎮撫頭取をした人である。明治３年，士族の三方原入植の時，三方原の奥大谷へ移住し，茶園を造成して小作人に貸与したり，大谷坂を改修して村人に便益を図ったり，大谷川の水を揚げて水田を開いたりしたが，約十カ年の開拓の努力空しく，遂に三方原を立ち去った。屋敷跡は松林となり，江川山と呼ばれたが，現在は耕作されて茶園となっている。

三方原台地の西北部を横切る大谷川の大谷（おおや）橋を渡る。江戸時代には通常飛び石で渡り，大通行等のときには仮の土橋を設けていた。

５９　大谷の石仏

坂を上る途中，右手の竹藪の階段を上がると石仏がある。

台座の部分に由緒が刻まれている。それによると，江戸時代末期にこの大谷に船越五郎兵衛という人がおり，弘法大師を信仰し，ここに大師堂を建立し，大師像を安置，さらに浜松宿と気賀宿の間に茶屋が少なかったため，無料の接待所を設けた……とある。

谷から上ると，平らな街道になる。「大概帳」によると，前山村地内に３６５０間にわたって松並木があった。

６０　曲り松

ここは姫街道と庄内道の交差点で，江戸時代に気賀の領主や街道を通る行列を送迎した場所といわれる。

樹齢約５００年といわれた初代の枝振りの良い松があったが，昭和４８年に枯れ，現在は３代目の松である。

松の横には，松島十湖の句碑がある。

「別るるは　また逢うはしよ　月の友」

松島十湖は，本名吉平。豊田郡中善地村（現在浜松市東区豊西町）の人で，明治１４年から１９年８月まで勤めた引佐麁玉郡長を退任して帰郷する際に，大谷の地まで別れを惜しんで見送った人々との別れにあたって詠んだ。

湖東西バス停のある付近で新道と旧道が分岐する。新道は右にカーブするが，旧道は左の細い道を直進する。ここだけは旧来の道幅である。

６１　六地蔵

伝正徳２年の建立。六体の地蔵は瓦葺きの祠に祀られている。西の竹藪に刑場があり，刑死者の霊を弔うために建立したと伝えられる。

気賀宿中村本陣文書の「本坂通御往来留書」寛政８年８月１２日の記事に「老ヶ谷六地蔵」の名が見える。

６２　史蹟

六地蔵のある交差点を北に進み，新道を左折して進むと下り坂の手前の前山に史蹟がある。

碑の裏には，元亀３年１２月２２日三方原合戦で，徳川家康を破った武田信玄は，この地付近に宿陣し，翌年天正元年１月７日に出発し，その後病に倒れたことなどを記している。

大正１３年１月建立。

６３　陣座ヶ谷古墳

新道の下り坂の途中，左側の案内標識から細い道を上ると，都田川を見下ろすように台地の端に古墳時代中期の古墳が２基　（前方後円墳と円墳）築かれている。都田川流域を支配した豪族の墓と思われる。

一つは全長５５ｍの前方後円墳である。鏡や刀の破片が出土している。また，墳丘から埴輪も出土している。

前方後円墳

古墳からの眺め

６４　老ヶ谷の秋葉常夜灯

姫街道は秋葉常夜灯のある角を右手に曲がる。

常夜灯は「秋葉山　文化八辛未六月吉日當所若者」と刻まれている。灯明台の一部が補修されている。

６５　千日堂

慶応４年の老ヶ谷区有文書によれば，老ヶ谷原山新開発の報償として建てられ，寛文１１年に気賀近藤家下屋敷（気賀呉石）にあった観音像を移して祀られた。宝永年間に阿弥陀如来を祀り，千日念仏を行ったことから千日堂と呼ばれる。現在も毎月９日の晩，老ヶ谷の人々によって念仏講が続けられている。

堂内には，気賀近藤家２代用治・３代用由の位牌が祀られている。境内には，宝永２年気賀宿有志が建てた石碑がある。

老ヶ谷一里塚の手前で旧道と新道が分岐する。分岐点には昭和２９年２月に建てた長坂改築の碑があり，旧道はその左手に進む。

一里塚を過ぎると，中央配水池のタンクがあり，右側の細い道を進むと長坂である。

６６　老ヶ谷一里塚

江戸から６８番目の一里塚。「大概帳」には，「木立松，但，左之塚ハ気賀地内，右ハ中下刑部村地内」とあり，道の両側には松を植えた築山があったことが分かる。近くには富士見茶屋と呼ばれる茶屋があったと伝えられる。

６７　長坂

旧道の面影を残す道幅２ｍ程の坂道であり，坂道下の新屋集落まで続いている。

坂の途中に「服部中保次様最後之地」「天正十五年六月十八日」と刻まれた碑がある。天正年間刑部地方の領主であった服部中保次は，この長坂で何者かに襲われて落命したという。

長坂を下り，秋葉常夜灯（鞘堂）の角を右に１００ｍ程進むと，コミュニティセンターの裏の斜面に，服部中保次の墓地がある。２代中保正が建てた墓碑を７代中保貞が建て替えたといわれている。

姫街道は，城跡の南から東に回り込み，落合川（都田川）の渡しへ通じている。

７０　金襴の池伝承

刑部城の北西の道路脇に説明板がある。かつて付近に金襴の蛇が住む大きな池があったという。家康軍との戦いで刑部城が落城するとき，城主の美しい娘が，敵に捕らわれることを避けて近くの池に入り，金襴の蛇に姿をかえ，池に住んでいるという伝承が残っている。しかし，今はこの池も埋め立てられ残っていない。

７１　屯倉水神社

引佐郡伊福郷に屯倉が置かれ，屯倉廃絶後も神社は存続した。永禄１０年堀川城築城に際し，堀川城付近にあった屯倉神社が現在地に遷され，水神社と合祀されたといわれる。

境内に秋葉常夜灯・鞘堂があり，明和八年の建立。大スギが市指定天然記念物。また，神社西側に道祖神があり，「天地道祖神」と刻まれている。

７２　道標

現在ＪＡとぴあ浜松細江支店 東側水路脇に建てられている。「左あきは山道」と刻まれている。もとは落合川（都田川）渡しの東岸の姫街道と秋葉道との分岐点にあった。

都田川と井伊谷川が気賀で合流するところから落合川と呼ばれる川に至る。ここは気賀関所の要害川の役割があったため，舟渡しが行われていた。通常は渡船１艘で舟渡しを行い，大通行の時は近隣の村々から船を調達していた。

６８　宗安寺跡

天正１５年に長坂で討たれた服部中保次の霊を弔うために建てられたと伝えられる。廃仏毀釈で廃寺となる。山門は気賀上町の正明寺に移築された。現在は石段，庭の一部，地蔵が残るのみ。石段を登ると長坂新道とぶつかる。新道に沿って本堂跡の石垣が残る。門跡は埋められている。本堂跡はみかん畑になっている。庭跡は廃屋の脇にある。地蔵は南奥の竹林前にある。宝永３年に造立。

６９　刑部城跡

１６世紀初頭，永正年間の斯波氏と今川氏の戦いから記録にある今川方の城。永禄１１年徳川家康の攻撃によって落城。天正年間に廃城。西半は道路で削られたが，東半は現存し，堀切，井戸などが残る。北東側の金山神社も曲輪の一部と考えられる。

７３　宝生地蔵

江戸時代の中ごろのものとされる。石仏の光背に「右はままつへ三里半　左秋葉山道　宮口へ二里　二俣へ四里」と刻まれる。もとは対岸の姫街道と秋葉道との分岐点付近にあったとされる。いつのころか落合川に沈み，再びこの土地にもどったという。

７４　気賀関所東門（冠木門）跡

「史蹟気賀関址」の石碑がある。この門をくぐると関所構内である。気賀宿の入口ともいえる門。現在は残存しない。

７５　気賀関所本番所

ききょうや化粧品店とノズエ時計店の間の路地を入った奥に，本番所の一部（下ノ間・勝手部分）が残る。嘉永７年の大地震で屋根に被害を受け，改修されている。屋根は切り妻風作り，狐格子が見える。

関所は気賀近藤家によって警護され，明治２年まで姫街道の通行者，主に「入り鉄砲」と女性の通行を取り締まった。関所には本番所，向番所，冠木門等の施設があり，周囲には堀，瓦屋根塀，矢来が廻らされていた。

７６　赤池様公園

公園内に「赤池細江大神御船着之地」と記された石柱と赤池様の由来を記した石碑。塀は赤池様にまつわる祭典の様子を示したレリーフとなっている。その由来は，明応大地震で新居の角避比古神社が流され，ご神体が赤池の里に流れ着いたが，その後，ご神体が現在の細江神社の地に移され，牛頭天王として祀られたという。毎年７月第三土・日曜日に行われる祇園祭には，神輿に乗ったご神体がこの赤池に巡幸し，神事が行われる。

７７　要害堀

四ツ角から西に延びる気賀関所防備のための堀。現在は葭本川の上流部にあたり，堀川と呼ばれている。

７８　気賀近藤家陣屋跡

気賀小学校と付近一帯は，江戸時代気賀近藤家の陣屋(もうあり)があった。

元和５年近藤用可のときから明治になるまで１２代にわたり，３５００石余の旗本として，気賀の領主および気賀関所の管理を勤めた。陣屋は関所の西に設けられた。

現在は陣屋の庭に植えられていたという椎の木が残るのみである。この椎の実はとても大きく，近藤氏が毎年この実を幕府に献上したことから江戸椎と呼ばれた。

７９　吉野屋旅館

日本画家野島青茲の生家。茅葺きの２階建ての建物など，意匠や材料に数々の工夫がなされた４棟の昭和初期の建物が残る。

この地は気賀近藤家陣屋の一部で，近藤用随が藺草を試植したといわれる池もある。

８０　細江神社

明応大地震（１４９８年）で流出した新居の角避比古神社のご神体が赤池の里に流れ着いたが，永正８年（１５１１）にこの地に移され，牛頭天王として祀られたという。明治元年に細江神社と改称された。細江神社社叢の楠には，大木の大きな穴にまつわる大蛇と大こうもりの戦いの伝承がある。

境内には藺草神社など多くの境内社がある。

藺草神社は，近藤縫殿助用随(もちゆき)を祀っている。用随は宝永大地震（１７０７年）による津波で田畑流失などの壊滅的な被害を受けた農民たちに，塩害に強い藺草の栽培を奨励した。やがて藺草栽培及び畳表の生産は奥浜名湖地域の主要産業となった。

８１　歴史民俗資料館

「浜松市姫街道と銅鐸の歴史民俗資料館」という。

資料館の手前には，旧山瀬家の産屋が移築されている。江戸時代末に建てられ，明治の初めころまで使われていた。細江地方で，昔はお産中の女の人は，一定期間家族と離れ，別火で生活をした。

８２　東林寺

堀川城の戦いで焼失するが，天正５年に再興。江戸時代には本陣の御退場寺(本陣で何か起きたときに危険を避けて逃れる場所）に指定されていた。山門は嘉永７年に奥山方広寺より移築された。

墓地中央付近には，士族による三方原開拓を推進した気賀林の墓塔がある。

貞観年間（平安時代初期）の作といわれる木造四天王立像は，市指定文化財。

８３　清水橋の道標

明治時代，清水橋のたもとに建てられた。西の面は「左　半僧坊　井伊谷　信州　右　秋葉　二俣　金指　道」，東の面は「左　豊川　三ヶ日　右　半僧坊　伊平　道」，北の面は「左　秋葉　金指　宮口　右　浜松　見附　道」，南面は「明治十七年建之」と建立者名が彫られている。気賀はかつて浜名湖北岸の交通の要衝であり，浜名湖の舟運を利用した物資の流通の中継地として重要な位置を占めていた。

８４　犬くぐり道

気賀関所を通行するためには，地元の人々でさえ通行手形が必要であり，夕方６時には門が閉められ，朝は６時にならないと開けられなかったため，大変不便であった。そこで抜け道が作られ，犬が通る道として黙認された。

清水橋の北から蓮照寺付近，細江神社の裏，東林寺前，正明寺裏から境内を通って姫街道と合流していた。蓮照寺の東側は現在は通行不能である。細江神社の裏には，筵をたらした犬くぐりが復元されている。筵の下をくぐって通り抜けたため，犬くぐりと呼ばれた。

東入口付近の馬頭観音

清水橋の北，犬くぐり道の東入口付近に馬頭観音がある。左面に「嘉永二酉四月吉日」とある。この位置が「犬くぐり道」の東の入口とされている。

犬くぐり道を東から西へたどることにする。ここからは犬くぐり道に入れないので，蓮照寺山門前を東に進み，突き当たりを左に折れて崖っぷちの登り道を進むと墓地に出る。

火切峰地蔵と東の竹藪

蓮照寺北東の墓地の横に火切峰地蔵の堂がある。犬くぐり道は堂の横を通っているようだが，通行不能である。竹藪の中にそれらしき道の跡がある。

蓮照寺境内を西へ

蓮照寺は明応２年（１４９３）創建。現在地へ正保３年に移転し，本堂は弘化５年（１８４８）再建。境内の番神堂の横に犬くぐり道が通る。

上平公園の北側を西へ

犬くぐり道は，蓮照寺をぬけると，上平公園の北側を西に向かって通る。

途中，現在の広い坂道付近で途切れるので，広い道に移る。

東林寺前を西へ

犬くぐり道は細江神社の北側を通り，東林寺の門前（資料館の北側）を西に進む。突き当たりを右に折れ，すぐ左に折れてまた西に向かう。

８４　犬くぐり道（つづき）

東林寺西側

広い道になり，坂を上る

広い道から左手墓地へ

墓地の坂を下ると左手に「塔ノ平地蔵」が祀られている。いぼ治しに霊験があるという。

地蔵の祠の前を右手（西）に折れ，さらに左手（南）に折れて坂を下ると姫街道の呉石バス停に出る。

８５　本陣跡

気賀は天正１５年宿と定められ，姫街道で最も重要な宿場となった。気賀宿には本陣が１軒あり，代々中村家が勤めた。中村家は気賀町および上町の庄屋も兼任し，代々与太夫を襲名していた。宇布見村の中村家の次男が気賀の代官となり，これが後に本陣となった。本陣の建坪９０坪，門構えはあったが，玄関はなかった。

屋敷跡は現在はＮＴＴの建物となり，現存していない。

８６　本陣前公園

本陣跡の近くにある。公園入口の脇に馬頭観音が祀られている。もと正明寺裏の犬くぐり道にあったもの。表面に「駿震（ようぶり）嚼（ぶり）薬」，背面に「寛政十二年十月四日」と刻まれている。

気賀近藤用和公の馬を供養したものではないかと言われている。

８７　正明寺

永禄３年創建。臨済宗。本陣中村家の菩提寺。江戸時代には本陣の御退場寺に指定され，休泊も行われていた。山門は，旧刑部村新屋集落の宗安寺（廃寺）より移築したもの。山門以外は明治以降の建築である。

８８　西枡形

気賀宿の西入口は石組みの上に土を積み上げ，矢来を組み，門が設けられ，内側が枡形となっていた。道路拡張工事で片側の石垣は失われた。石垣の石組みの中に瓢箪形の石がはめ込まれている。

石垣に接してもとは道の北側にあった秋葉常夜灯が建つ。安政４年建立。

８９　獄門畷

「堀川城将士最期之地」と刻まれた石碑が建つ。 永禄１２年３月２７日，徳川家康は堀川城を攻落し，９月９日捕らえた者をここで処刑した。小川に沿った堤に首がさらされたと伝えられる。処刑者は，一説に七百余名という。

西に進むと，新道と分岐する。右手の旧道を進むと，右手に「活民院殿参道」と刻まれた標柱が建てられている。気賀近藤家墓所への参道である。

９０　新田喜斎公之碑と墓

参道の途中，新田喜斎を祀った知足院（廃寺）跡付近に石碑が建てられている。新田喜斎は堀川城主で，落城の時城を抜け出し，金地院に潜んだ後，呉石御所平に住むが，慶長１１年に徳川家の家臣，石川半三郎に斬られたという。

現在，新田喜斎の墓が近くの全得寺に移されている。

９１　姫地蔵と六地蔵

姫地蔵は，近藤家の姫がこの地蔵に願掛けをし，皮膚のできものを治したとの伝説から，姫地蔵と呼ばれる。

六地蔵はもと姫街道の長楽寺沢橋の傍らにあった。現在は新しい六地蔵が祀られている。

９２　気賀近藤家墓所

この墓所は御所平とか御下屋敷とよばれ，気賀近藤家代々の領主が分骨されて祀られている。６代用随（もちゆき）の墓石には「活民院殿」と刻まれている。用随は藺草の栽培を奨励し領民を救ったことで知られている。

９３　諏訪神社

神社参道入口に秋葉常夜灯・鞘堂，巡礼碑がある。巡礼碑には「奉巡礼西国四国秩父板東　文政四辛巳十一月吉日」と刻まれている。

９４　気賀関所（再現）

平成元年度ふるさと創生事業で整備した施設。再現した冠木門（かぶきもん），町木戸門，本番所（ほんばんしょ），向番所（むかいばんしょ），遠見番所（とおみばんしょ）があり，分かりやすく紹介している。

姫様館では，関所関係資料，中村本陣関係史料，浮世絵などを展示している。

９５　伝堀川城跡

「堀川城址」の石碑，首塚がある。堀川城は永禄１０年（１５６７）築城。城主は新田喜斎。永禄３年（１５６０）の桶狭間の戦いで今川義元が戦死した後，今川氏真方の大沢基胤に味方した山村修理や地元の農民たち２０００人が立てこもる堀川城は，永禄１２年（１５６９）３月２７日，３０００人の徳川家康軍に攻められて落城し，立てこもった人々は「男女共にナデ切」（三河物語）にされたという。その後，捕らえられた７００人余の人々も９月９日首を打たれて，首がさらされた。

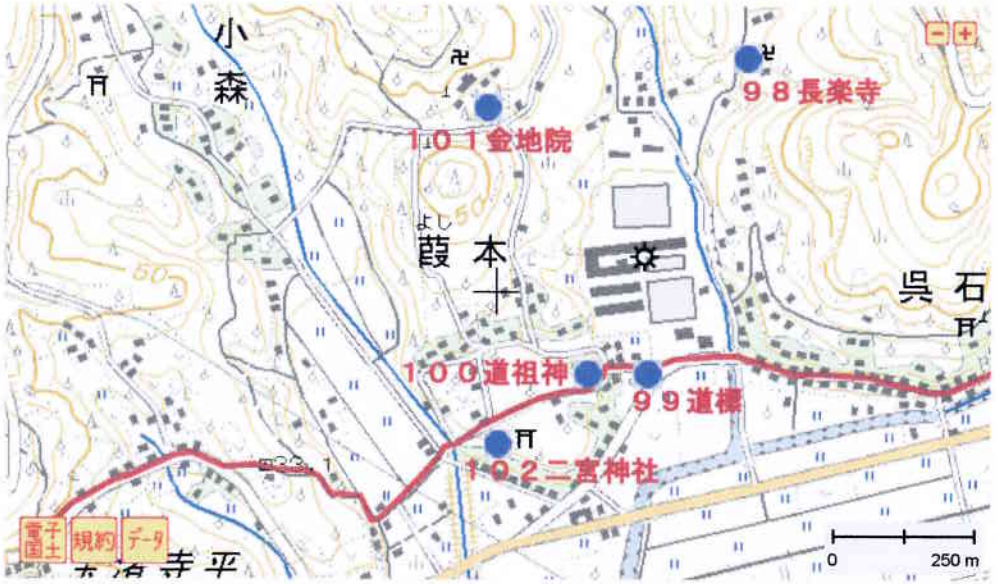
遺構は残らず，正確な位置は不明である。

９６　薬師堂

細い道を２０ｍ程北に入ると左手にある。薬師如来の石仏が安置されている。文化８年の棟札や弘化４年の棟札がある。

９７　呉石学校跡

呉石川の東側にあり，呉石田園公園として整備されている。「呉石学校の跡」の石碑，二宮尊徳像がある。また，奥浜名湖地域の藺草栽培についての説明板がある。



９８　長楽寺

大同年間創建と伝わる真言宗の古刹。姫街道から呉石川，長楽寺川沿いに進む。山門には獨湛筆の額がかかる。　　客殿，山門等，江戸期の建物が残る他，文化財が多い。本尊は護摩堂に安置される木造馬頭観音座像である。庭園は北方の富幕山南腹の光岩を借景に取り入れた遠州流の庭園で，満天星と石が小高い山に巧みに配置されている。境内の梵鐘には「遠江国引佐郡気賀庄　長楽寺　嘉元三年（１３０５）乙巳四月十日鋳之　大工平正継」との銘がある。(県指定文化財)

（木造馬頭観音坐像は市指定文化財）

９９　道標

ここで旧道は，左方向の広い道と分かれ，直進する。「是金地院道五丁　左三ヶ日往還　大正十二年十月施主」と刻まれている。

１００　道祖神

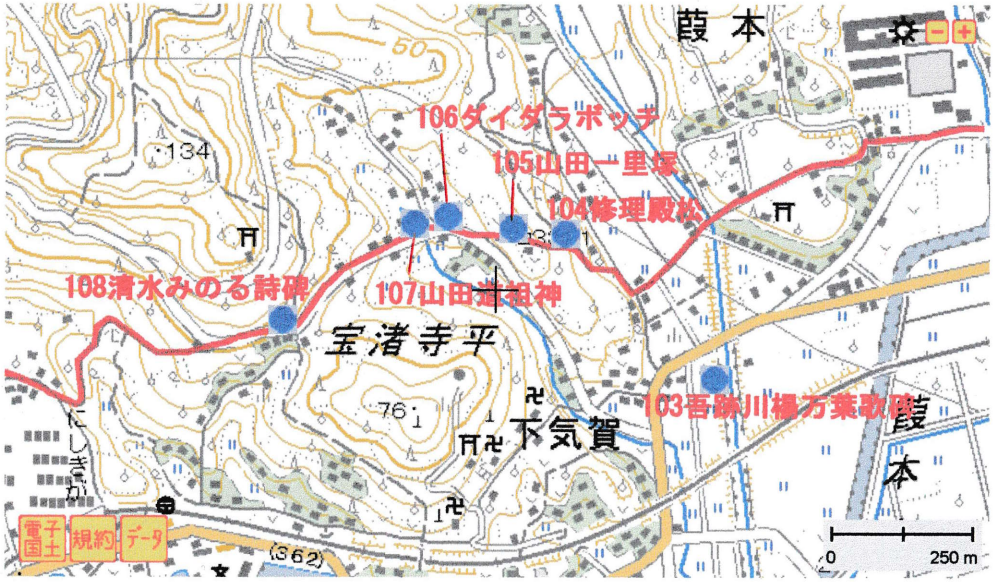
姫街道と金地院道との分岐点に建てられている自然石で，道祖神と伝えられる。もとの位置からやや移動されている。左側に小祠と碑があり，碑には「南無妙法蓮華経」と刻まれている。ここから姫街道は左手（西）のやや上り坂となる。

１０１　金地院

道祖神のある分岐点の右手（北）５００ｍ程にある。建武年間開創。宗良（むねよし）親王妃であったという駿河姫（井伊道政の娘）を開祖としている。明治９年に江戸期建立の観音堂と山門を残して焼失。昭和３年本堂再建。西側の墓地の中央付近に，当寺で自決した勤王の書家永知楽の墓塔が建つ。また，山門より西側１００ｍほどの所に「岩神」と刻んだ自然石がある。このあたりは駿河姫の墓所と伝えられ，天保年間に住職によって碑が建てられたという。

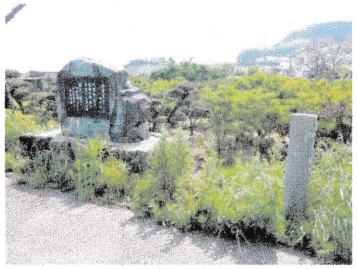
１０２　二宮神社

宗良親王妃といわれる駿河姫を祭神とする。延元３年（１３３８）京へ上ろうとする宗良親王を送ってきた駿河姫がこの地で急病で亡くなったので，社殿を建てたと伝える。境内には一子と伝えられる尹良（ゆきよし）親王を祀る若宮神社も鎮座する。社殿に上る石段の左手に天然記念物のホルトノキ・ナギがある。



１０３　吾跡川楊万葉歌碑（あとがわやなぎ）

万葉集「霰降り遠江の吾跡川楊刈りつともまたも生ふとふ吾跡川楊」（巻７－１２９３）の吾跡川の所在地は近江説と遠江説があるが，遠江説は呉石川をあてている。明治１５年に姫街道脇に松島十湖らによって歌碑が建てられた。前面に「吾跡川楊之古跡　是ヨリ南二町拾五間」，側面に歌が刻まれている。昭和５７年に柳公園が整備され，現在地に移された。平成８年には新しい歌碑が建てられた。



１０４　修理殿松

永禄１２年（１５６９）堀川城落城の際，城将の一人山村修理は舟で逃れ，この地で切腹したと伝えられる。その後，里人がその霊を弔うために松を植えたといわれ，内山真龍の「遠江国風土記伝」にも記されている。松は枯れてすでにない。「山村修理之墓」と刻まれた自然石と「永禄十二年三月廿七日　堀川城戦没者之碑」が建つ。

１０５　山田一里塚

江戸から６９里目の一里塚であり，「本坂通宿村大概帳」には「木立無之，但，左右之塚共気賀村地内」とある。北側の一里塚跡に標柱があり，南側は宅地となっている。

１０６　ダイタラボッチの足跡伝承

琵琶湖を掘って富士山を造ったという，伝説の巨人ダイダラボッチの足跡と伝えられる池である。尉ケ峰に腰をかけて弁当を食べたとき，ご飯の中に入っていた小石を浜名湖に捨てたら，礫島ができたという。そして腰をかけた尉ケ峰は少し低くなった。巨人伝説は日本全国に伝えられていて，古くは奈良時代の風土記に書き表されたものもある。

１０７　山田道祖神と馬頭観音

辻に道祖神と馬頭観音が並ぶ。右が道祖神で正面に「道祖神」と刻まれている。左が馬頭観音で，表面の風化が進んでいる。

１０８　清水みのる詩碑

清水みのるは，浜名郡伊佐見村（現在の西区伊佐地町）生まれの作詞家（１９０３～１９７９）。代表作に「森の水車」「かえり船」「星の流れに」「月がとっても青いから」等がある。赤砂利稲荷参道入口に「姫街道」と題し，「尋ねようもない　幾歳月の流れの中で　姫街道は　今も静かに息づいている」との詩碑がある。

１０９　赤砂利稲荷

広玉稲荷ともいう。参道を上るとオレンジロードの北側にある。この地は山伏の修験道場として栄えたが，南北朝の争いの際，南朝方へついたため，南朝の滅亡とともに衰退し滅びた。村人たちが建てた祠は稲荷大明神となったが，後に大きな神社に合併された。明治の中頃に再建し祀った。この稲荷に失せ物を願うと出てくると言われ，信仰を集めた。

１１０　小引佐

眼下に浜名湖の引佐細江が一望でき，風光明媚な場所である。広い道から左手の旧道への下り坂に入った所に，塞の神を祀った祠がある。ここから岩根集落にかけて石畳で修景されている。

１１１　下村地蔵

小引佐からの石畳を進む。周辺はみかん畑が広がる。道の右手に下村地蔵がある。幕末にこの地で処刑された人物（きよぞう）の霊を弔うために建てられたという。

途中から林の中を通り，石畳の道を下ると，岩根集落に出る。

１１２　薬師堂と秋葉常夜灯

薬師堂の創建年代は不詳。天保６年（１８３５）再建。本尊は薬師如来坐像。その台座裏に「天保六年未年四月願い叶い，薬師堂再建立でき七月十六日より二十三日迄開帳」と記されている。

西隣の秋葉常夜灯には「奉献秋葉山夜燈　文化二乙丑年（１８０５）正月　岩根連中」と刻まれている。

岩根川の橋を渡り，左へ細い坂道を上り，広い道に出てしばらく進む。左手の石畳の旧道に入る。林の中の石畳を進むと左手に岩根地蔵がある。地蔵の近辺５０ｍは古い石畳が残っている。

１１３　平岩御休憩所

地蔵を過ぎると，右側に平岩（姫岩）がある。「大概帳」に「気賀村地内引佐峠前ニ字平岩と申所茶屋場有之，姫・宮通行之節ハ，右場所へ領主ヨリ小休所補理候由」と記されている。大名行列等に近藤家の家臣が出向き，湯茶の接待をした場所である。

この石の上に座ると良いことがおこるといわれている。

１１４　引佐峠

引佐峠手前１００ｍは古い石畳が続く。石段を上りきった所に休憩所があり，さらに上ると峠である。

「大概帳」に「気賀村内引佐峠之難所弐ケ所」「眺望絶妙之風景，本坂越之景地なり」と記されている。現在は雑木で覆われ，見晴らしはよくないが，昔の面影を残す場所である。

１１５　象鳴き坂

引佐峠から西へ下る坂道は急で曲がりくねっている。最も急な坂が象鳴き坂である。

享保１４年（１７２９），清国商人が献上した南越（ベトナム）の象が江戸に送られる途中，姫街道を通った。「本坂通御往来留書」に「長崎ヨリ江戸面江御用之象一疋罷下リ吉田泊，五月八日気賀泊リ」と記され，気賀では本陣の西に象小屋を作った。気賀宿からは金指御陣屋の下を通り，祝田一本松へ上って三方原へ進んだ。

１１６　石投げ岩

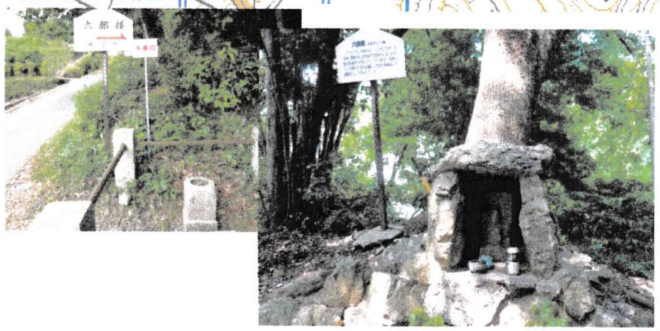
姫街道沿いの左手に１ｍ四方の大きな岩がある。この岩に旅人が石を投げあげると無事峠越えができるといういわれがあった。

林をぬけると，みかん畑になる。

１１７　大谷一里塚

江戸から７０里目の一里塚である。大谷村と佐久米村の境にある。塚は現存しない。南側に「旧姫街道　一里塚址」の石碑がある。「大概帳」に「木立左無之。右松」と記されている。**塚の大きさは５間四方であった。**

大正１５年の調査記録には，南側は一部切り崩され，北側はほぼ残ると記されている。



１１８　黒坂の森

「六部の森」ともいわれる。水準点のある森の入口を入ると，明和４年（１７６７）大谷村と都筑村の境で行き倒れとなった六十六部廻国聖（修行僧）の円心の墓がある。地元では「六部様」と呼ぶ。北方１ｋｍにある高栖寺には、円心が背負っていたという厨子と金箔の子授観音像が安置されている。

１１９　大谷代官屋敷

寛永６年（１６２９）大谷近藤家は給人として大野頼忠を任命した。江戸在住の近藤氏に代わり，大野氏が領内を支配した。古井戸と門前の山本川に架けた橋の礎石が庭内に残っている。

１２０　大谷近藤陣屋跡

陣屋は東西３０ｍ，南北６０ｍの郭。現在全体がみかん畑になり，わずかに井戸跡，池跡が分かるのみ。

大谷近藤家は寛永元年（１６２４）気賀近藤家から分家し，三ヶ日北部，内野（浜北区）に３０００石の知行地を持った。

天保１３年（１８４２）陣屋を内野に移した。

１２１　伝安形伊賀守屋敷跡

「遠江国風土記伝」に「安形伊賀屋敷，伊賀は天正中，佐久城に徳川君を奉じて臣となる」とある。伊賀守正道は宇都宮戸田藩の家老となった安形氏の祖。畑の中に「縣伊賀」とのみ刻まれた祠がある。地元の人々は「伊賀さま」とか「伊賀堂」と呼んでいる。

１２２　慈眼寺

弘治２年（１５５６）創建。明治初年に全焼後，佐久米阿弥陀堂を移し，庚申堂として金剛童子像を安置した。庚申堂の格子天井には，弘化４年（１８４７）に福田半香，林棕林，伊東蘆水，石川晶斎等によって　描かれた天井絵がある。

境内にある秋葉常夜灯は文化２年（１８０５）のもの。石垣に囲まれた灯明堂もあり，軒瓦には秋葉山と書かれている。

慈眼寺前の姫街道を西に進むと，東名高速道路にぶつかり，街道は大里峠付近まで所々分断されている。その場所は迂回路を進むことになる。

１２３　大里峠へ

①分断　右迂回路

②分断地の先の旧道

③左旧道　右迂回路

④右東名で分断

⑤左東名北側の迂回路
右旧道大里峠へ
すぐ行き止まり

⑥迂回路の陸橋から
大里峠を振り返る

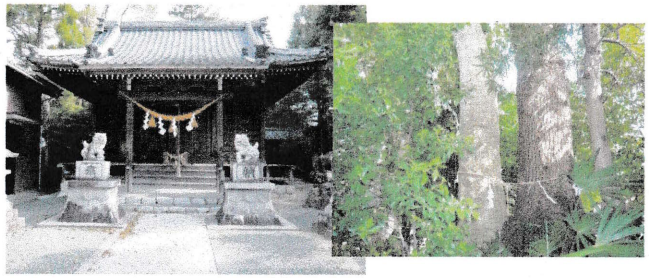
１２４　宇志の茶屋と高札場

小さな四つ角に茶屋跡がある。「大概帳」に大名や姫など身分が高い人が通ったとき接待をしたことが記されている。一般の通行人も休んだり草履を買ったりしたという。

すぐ西に高札場跡がある。

１２５　片山竹茂墓碑

茶屋跡から北の坂を上がった墓地の中にある片山竹茂の六角柱の句碑及び墓碑。文化１０年（１８１３）に３３人の世話人弟子によって建立された。正面には辞世の句「迚もゆくこころせはしや雪の山」が刻まれ，左側には追善の句が１１句記されている。竹茂は宇志八幡宮の宮司で俳諧指導者であった。



１２６　宇志八幡宮

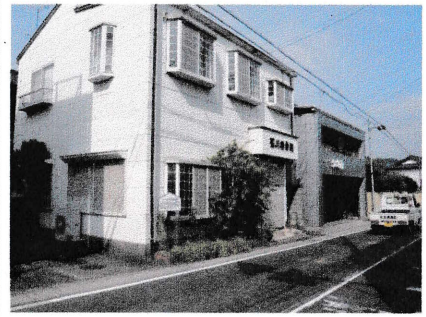
江戸時代には朱印高１５石を領していた。摂社である赤鶴神社には，南北朝から室町期にかけて能面彫刻の名人赤鶴吉成作と伝えられる父尉・鉢巻悪尉の２面を蔵している。江戸時代までは能舞が行われていたという。能面は大洪水の際，宇志の西南の浜名湖岸に漂着したもので，以来大旱の際，漂着地に移して祈願すれば，必ず降雨があると信じられてきた。

境内には，根本が合体したイヌモチと楠があり，ご神木となっている。また，寛政元年（１７８９）銘の秋葉常夜灯・鞘堂がある。

１２７　三ヶ日一里塚

江戸から７１里目の一里塚。「大概帳」には「木立左無之。右松」とある。塚は現存しない。北の塚は古くからなく，南の塚も明治初年に削られて瓦土になったという。

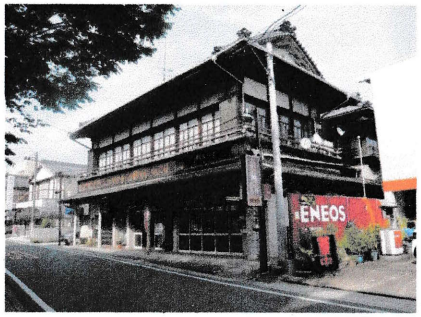
ここから三ヶ日宿に入る。



１２８　問屋場跡

「大概帳」には，人馬継問屋場は定まったところはないが，諸家通行の際は百姓家を問屋場に見立て，村役人が業務を扱うとしている。実際は村役人である石川家が勤めた。

幕末の画家石川晶斎は同家の生まれである。



１２９　旧吉野屋

三ヶ日四辻と呼ばれる交差点を北に折れると右手に昭和初年に建てられた旧吉野屋呉服店がある。もとは銅板葺きの屋根であった。現在１階は貸店舗，２階は厚生会館である。

平成２６年現在，取り壊されている。

１３０　旧清水屋呉服店と脇本陣跡

旧清水屋呉服店は嘉永３年（１８５０）創業。火災により明治３９年（１９０６）に現在の建物に建て替えられた。防火のため一部が漆喰壁となっている。

旧清水屋呉服店の東隣に石川脇本陣があったが，現存しない。「大概帳」に「脇本陣無之」とあり，公式に認可されたものではなく，本陣が満員になった際に，脇本陣的役割を果たしたという。

１３１　三ヶ日本陣跡

旧清水屋呉服店の向かいに小池本陣があったが，現存しない。「大概帳」には「凡建坪九拾五坪，門構・玄関附」と記される。享保３年（１７１８）に徳川吉宗の母，浄円院が姫街道を通行した際の宿泊の記録が残る。伊能忠敬も文化２年（１８０５）３月２５日にこの本陣に泊まった。「浜名湖測量日誌」には「小家なれ共家作よし。酒造をなす。」と記されている。

１３２　浜名惣社神明宮

延喜式内社である英田（あがた）神社と考えられているこの神社は，この地の古代豪族であった浜名県主（あがたぬし）が祖神を祀っていたが，伊勢神宮領になる際に神明宮になったという。

拝殿の背後の大輪山中腹に本殿がある。本殿は板倉造（井籠造）という古い建築様式であり，文政７年（１８２４）以前の建物で重要文化財に指定されている。

拝殿の左手には板倉造の摂社天羽槌雄神社本殿（県指定文化財）がある。

入口の鳥居を入った参道右手に，秋葉常夜灯・鞘堂がある。本陣前から移築されたものである。

１３３　三日池

三ヶ日の地名の由来になったといわれる小さな池である。伝説では，昔，三ヶ日の長者がこの池の魚を捕ろうとして人を雇い，三日間水を替えさせたが，遂に干すことができなかったという。以来この池を三日池，長者を三日長者，長者の住む里を三ヶ日村というようになった。

１３４　初生衣神社（うぶぎぬじんじゃ）

機織の神，天棚機姫命（あめのたなばたひめのみこと）を祭神とする。古来より三河の赤引の糸で神御衣（かんみそ）を織って伊勢神宮に奉献してきた。明治時代以降は途絶えたが，昭和４３年に神御衣の奉献を復興した。宮司は隣接する神服部（かんはとり）家である。境内に織殿があり，神御衣を織った古式の紡織用具が残されている。

三ヶ日宿の西で，釣橋川と宇利山川が合流するすぐ上手を姫街道が通る。「大概帳」では「仮橋渡しなり」とあり，大名行列の際に仮橋を組み立てた。通行の際には大谷近藤家の給人の大野氏が座して迎えたという。

１３５　釣の秋葉常夜灯・鞘堂

常夜灯は大正５年（１９１６）に木造であったものが石造に建て替えられた。鞘堂には明治１４年（１８８１）の棟札があり，昭和６０年（１９８５）に改修。

１３６　西山古墳

径１４．５ｍ，高さ３ｍの円墳で疑似両袖式横穴式石室がほぼ完全な状態で残る。６世紀後半の築造と推定される。かつてはこの付近から華蔵寺背後にかけて多くの古墳があったという。

１３７　あごなし地蔵

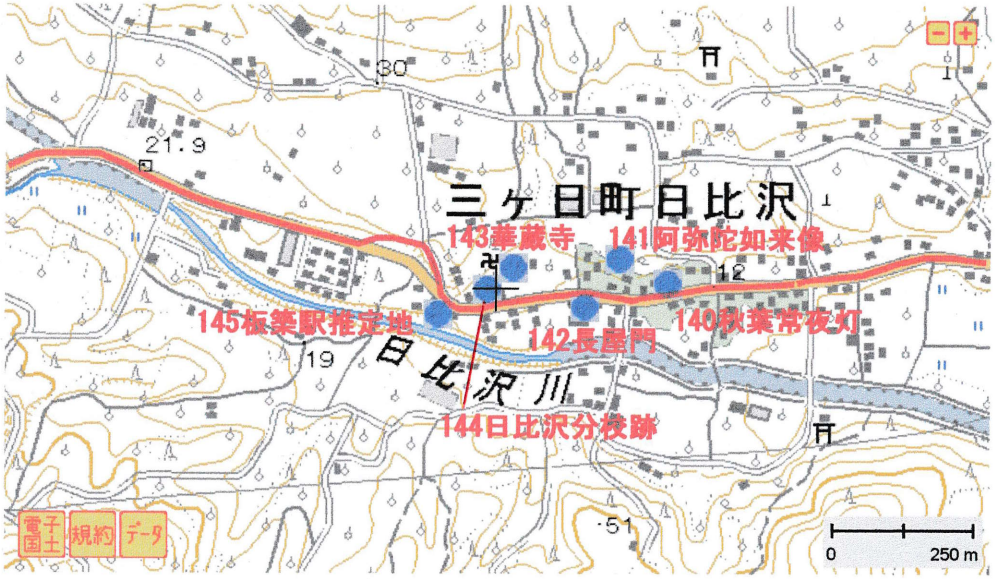
板石を組み合わせた祠に安置されている。仏像が浮き彫りされ，その下にあごなし地蔵と刻まれる。歯痛によくきくという。

１３８　山論犠牲者供養塔

寛永１９年（１６４２）山論のために犠牲になった７人の供養塔である。日比沢・本坂村が入会地としていた本坂山へ三ヶ日村の者が入り込んだため紛争となり，日比沢・本坂村の惣百姓が幕府に越訴した。訴えは認められたが，両村の庄屋と家族男子が処刑されるという結末となった。これにより約３００年が経過した昭和１６年（１９４１）に犠牲者の供養塔が建立された。この碑には「寛永十九年八月三日当村作之治・甚左衛門・岩蔵外四童子山論ノタメ相果テシヨリ三百年　今日碑ニ録シテ其ノ功績ヲ偲フ」と刻まれている。

１３９　日比沢城跡

浜名氏に属した日比沢後藤氏の居城跡。永禄１１年（１５６８）の徳川家康の遠江侵攻に抗した浜名頼広に従って抗戦したが，翌年に開城。天正１８年（１５９０）に廃城。丘陵端に長方形に区切られた平山城。東西の３曲輪からなる。「城坂」「城下馬場」の地名が伝わる。本曲輪部分はほぼ残存しており，土塁，堀，井戸跡などが残る。



１４０　日比沢の秋葉常夜灯・鞘堂

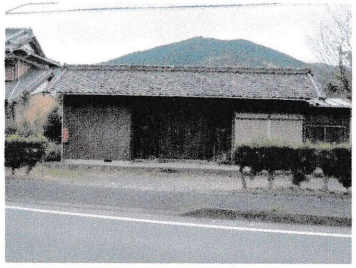
日比沢集落センター駐車場の東端にある。常夜灯は木製である。

１４１　阿弥陀如来像

日比沢集落センターの西６０ｍ程を北に折れ，細い坂道を上る。左側にブロックの祠があり，石製の阿弥陀如来像が安置されている。イボがよく治るといわれている。

秋葉常夜灯・鞘堂

阿弥陀如来像



１４２　門屋の長屋門

「門屋」とよばれた日比沢の庄屋鈴木家屋敷跡に長屋門のみが残る。屋敷地の北西端に鶴眠斎秋月翁壽碑がある。茶道や華道にも精通した鈴木又七の頌徳碑である。題額は金原明善書で大正元年に門人によって建てられた。

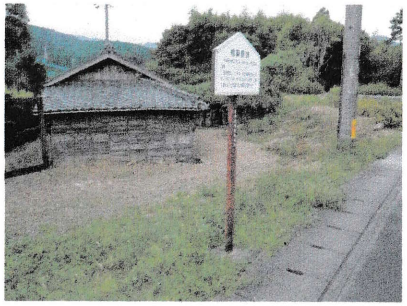
１４３　華蔵寺（けぞうじ）

創建時期は不明だが，弘治２年（１５５６）に再興，以後曹洞宗となる。朱塗りの山門（四ツ足門），本堂，大日堂，観音堂，鐘楼がある。華蔵寺には，鎌倉初期の釈迦如来坐像，室町時代の大日如来像と阿弥陀如来像など，文化財に指定された仏像が多い。鐘楼は，昭和２年増水した都田川へ転落した女生徒を助けようとして殉職した河西訓導（当時の住職）の冥福を祈って寄進されたもの。また，延享３年（１７４６）に造られた「白山妙理大権現」の石製の祠があり，その横に華蔵寺西の三叉路にあった道標がある。上部に仏像が浮き彫りされ，下に「右」「左」の文字のみ残存，下部は欠損している。

１４４　日比沢分校跡

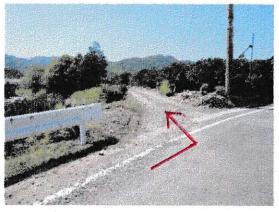
明治６年に華蔵寺に日比沢学校が開設され，明治３４年に尋常小学校分教場となり，同４３年に木造校舎が建てられた。現在残る校舎は昭和２５年に建てられた。昭和４４年閉校となった。昭和１２年に造られた二宮金次郎像は銅製であったが，戦争中の金属供出で失われ，昭和２８年石造で作り直された。

校舎は，平成２８年現在，取り壊されている。



１４５　板築（ほうづき，いたづき）駅推定地

板築駅は，東海道の猪鼻駅（新居町北西部付近）が天長１０年（８３３）大地震で崩壊し承和１０年に復置されるまで１０年間存在した古代の駅である。姫街道が官道となり駅が設けられた。また，「続日本後紀」に承和９年（８４２）条に，橘逸勢（はやなり）が都で謀反を起こして罪に問われ，伊豆へ配流される途中，板築駅で死去したという記事がある。



姫街道は，板築駅推定地より右手の坂道を上り，すぐ左手の細道を進む。林の脇を通って左の広い道に下る。

日比沢川に沿って進み，森川橋を渡ると，姫街道は右手のみかん畑に沿った細い坂道を上がっていく。坂の途中に本坂一里塚がある。

１４６　本坂一里塚

江戸から７２里目の一里塚。北側の塚は良好な状態で残る。「旧姫街道　一里塚」の石碑が建つ。南側の塚は新道建設のため土砂が採られ消滅した。現在の南側の塚は復元されたものである。「大概帳」には「立木松」とある。大正末期には北の塚には２・３本の桧，南の塚には桜の古木があったという。

北側の塚に接した祠には，６体の馬頭観音が祀られている。中央の大きな像は，文久三年亥（１８６３）四月吉日の建立。左端は天保四年巳正月十四日　後藤八百吉建立の銘がある。毎年３月午の日に家畜供養の祭りが行われる。西隣は牛馬の埋葬地であったという。

姫街道は一里塚で左に折れ，坂道を下って再び広い道に出る。

本坂一里塚より２５０ｍ程進むと，旧道は左手の細い道に入り，本坂の家並みになる。

１４７　本坂の古関推定地

戦国時代以降，本坂に関所が置かれていた。「遠江国風土記伝」では，関所は天正以前に置かれ，本坂の地頭である後藤氏が関守を勤めたという。元和５年（１６１９）に後藤氏が紀州徳川家の家臣として紀州に移った後は，気賀近藤家が管理したが，気賀関所が設置されたことにより廃止された。延宝８年（１６８０）には関所の位置が不詳となっていた。現在この地に「関屋」と呼ぶ地名が残っている。

１４８　後藤観音堂

本坂関所の関守であった後藤氏の後裔一族が建立し祀っている。境内は後藤氏関係者の墓地となっている。この西側に「源兵衛屋敷」と呼ぶ館跡がある。

１４９　伝橘逸勢墓

橘神社は橘逸勢の霊を祀る祠で墓と並んでいる。三筆の一人として有名な逸勢は，承和９年（８４２）謀反の罪により伊豆に配流される途中，板築駅で落命した。この時父逸勢の身を案じてつき従っていた娘は，遺骸を駅の近くに葬り，妙冲（みょうちゅう）という名の尼となって菩提を弔っていた。その後父の罪が許され，遺骸と共に京へ帰ったという。境内には娘の孝行を称えた旌孝碑や筆塚などが建てられている。

１５０　高札場・秋葉常夜灯・鞘堂

本坂の中心地にある札木（高札）の土台で，石組みでできている。この場所は本坂村の茶屋本陣であった庄屋梅藤家への道と姫街道とのＴ字路になった地点で交通と政治の要に位置している。

高札場の横に秋葉常夜灯・鞘堂が建つ。常夜灯には「秋葉山常夜燈　当所安全　文化四年（１８０７）正月吉日」と刻まれる。

高札場のあるＴ字路から南へ行ったところに茶屋本陣がある。本坂村の庄屋梅藤清左衛門家である。本坂峠を越える前後に大名等が休憩したところといわれる。長屋門があるところから「門屋」と呼んでいる。

姫街道近くに山論犠牲者になった先祖の塚があったが，最近屋敷の裏に墓を移したことや，分家が街道沿いや峠で茶店を開いていたことを，家人が話してくれた。

姫街道を西に進むと，急な上り坂になり，新道に出る。新道を横切ると，すぐ右側の細い道が弘法堂に至る旧道である。

１５１　弘法堂

道の北側に２体の弘法大師像が祀られている。本坂峠越えの安全を祈願したものであろうか。

弘法堂を過ぎると再び新道と合流するが，すぐ右手の細い坂道が本坂峠への登り口の旧道である。

石畳の道が続くが，昭和３４年の電話ケーブル敷設の際など，新しい時期にしかれたものである。国道を横切ってさらに石畳の山道を登り，切り通しの多い山道を進むと，鏡岩である。

１５２　鏡岩

山道の左手（南側）にある磨いたような断面を見せる高さ３ｍ，長さ１０ｍの大きな石で，チャートの断層である。ここを通る女性たちは自分の姿を写して化粧直しをしたという。また，ある盗人がこの前に立った時から曇ってしまったと伝えられている。

１５３　椿の原生林

再び国道を横切ってすぐのところ，姫街道沿いにヤブツバキが群生する。中には樹齢２００年以上のものもある。１月から３月にかけて花が見られる。

１５４　本坂峠

標高３２８ｍの本坂峠。ここが三遠国境である。「大概帳」には，「本坂村は字七曲り本坂峠の難所有之」と記され，「今切御関所由来」には「本坂越えは道狭くけわしくて箱根・笛吹峠より難く，恰も蜀難の地の如し，一度往く者は二度越えんことを思わず」とあり，姫街道唯一の難所であった。

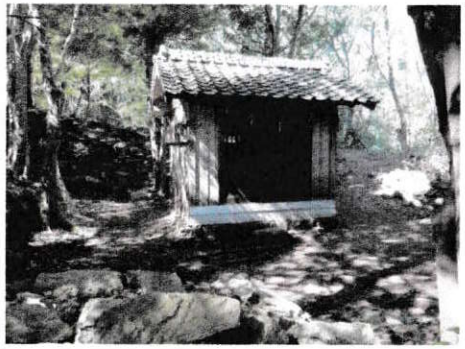
平安時代には橘逸勢が流人として通り，戦国時代には武田信玄が大軍を率い，江戸時代には将軍吉宗の母浄円院が通り，将軍に献上する象が通り，幕末には天璋院篤姫が通った。そして多くの人々が難儀をしながらこの峠を越えた。

峠には大通行の際のみ臨時的に茶屋が設置された。峠のすぐ東側の街道北側に平場があり，その付近と思われる。「大概帳」に「本坂峠に茶屋有之，是は姫・宮方并重き通行之節は領主は小休所取繕候由」と記される。しかし，幕末から明治にかけては常設の茶屋があったと思われる。

１５５　坊ヶ峰観音堂

本坂峠の北へ尾根沿いに急勾配の坂を登ると，坊ヶ峰にある観音堂に至る。標高４４６ｍ。一辺１０ｍ程度の石塁に囲まれた中に観音堂がある。観音堂は宝暦２年に建立。毎年春に観音堂供養が行われている。

観音堂の裏には，秋葉神社があり，その背後に，延享４年（１７４７）に本坂村の庄屋梅藤清左衛門が寄進したと記されている石祠がある。

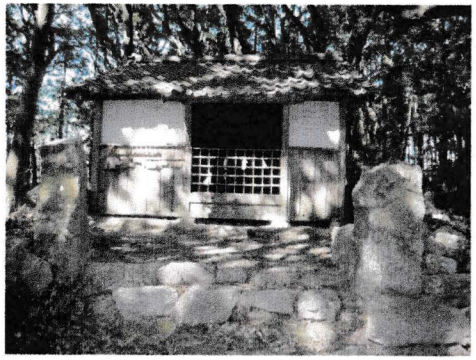


本坂隧道愛知県側

１５６　本坂隧道

大正３年から本坂峠開削工事が２か年計画で着工，翌年７月に本坂隧道が竣工した。長さ２１４ｍ，高さ４．５ｍ，幅５ｍの煉瓦造りのトンネルである。背面には亜鉛板を張って漏水を防ぎ，路面には混凝土を施し，側溝が設けられている。

昭和５３年に新本坂トンネルが開通し，主要道は国道３６２号バイパスに移った。



１５７　浅間神社

浅間神社は，本坂峠の南にある山の頂上あたりにある大山浅間社(頭浅間)，中腹にある原川社（腹浅間），麓にある富士社（足浅間）の総称である。古くから浅間様と称せられて，頭のことは頭浅間の大山祇命に，腹のことは腹浅間の木花咲耶姫命に，足のことは足浅間の秋津姫命にそれぞれ祈願すれば霊験あらたかと伝えられ，頭浅間には大黒頭巾を，腹浅間には腹かけを，足浅間には脚絆を，それぞれお礼参りの品として神前の大榊につるすならわしとなっている。明治４１年大山浅間社は原川社に合祀された。

七曲がり

本坂峠より嵩山一里塚へ下る道は急坂で曲がりくねっていて，「七曲がり」といわれている。 また，途中，弘法大師が喉を潤したといわれる「弘法水」や「茶屋場跡」，「腰掛岩」，「座禅石」，「茶旧川橋」「姫街道石碑」などがある。

弘法水

座禅石

腰掛岩

茶屋場跡

茶旧川橋

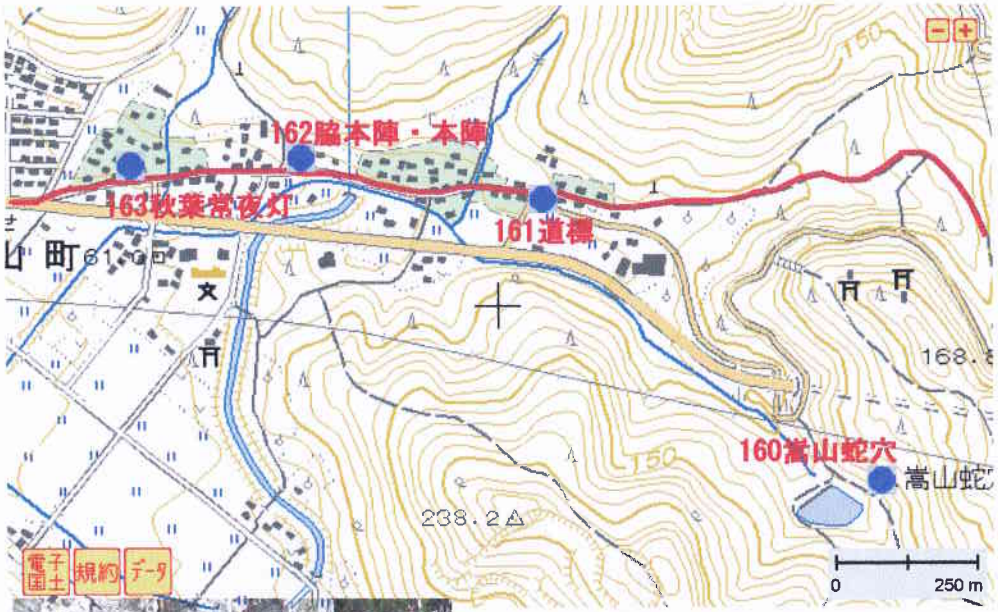
姫街道石碑

１５８　嵩山一里塚

国道を横切りしばらく進むと，江戸より７３里目の一里塚である。「大概帳」には「木立無之，但，左右の塚共嵩山地内」とあるが，現在は山林の中で左右とも雑木が生えている。（市指定史跡）

１５９　道標

山道から平坦になるあたりから不動滝への道が分かれており，自然石の前面に「左ふどうさま」と刻まれている。



１６０　嵩山蛇穴

この付近は石灰岩層が広く分布し，いくつかの鍾乳洞がある。嵩山の蛇穴は古くから知られる鍾乳洞である。昔からこの穴の中には大蛇が住んでいたので，蛇穴と名付けられたといわれ，また，この穴は長野県善光寺に通じているとの伝説もある。縄文時代早期の岩陰住居遺跡であり，押型文土器や矢じり，石斧等の石器，骨角器やハマグリ・シジミ等の貝類が出土している。開口部は狭いが，中は広く７０ｍ程奥へ進むことができる。 国の指定史跡である。

１６１　道標

本坂峠への登り口，嵩山宿への入口にあたる所に「姫街道　東　本坂峠　西　嵩山宿」の新しい石柱が建つ。石柱の北側に「ましらなく　杉のむらだち　下にみて　幾重のぼりぬ　すせの大ざか」と，香川景樹の歌が刻まれ，東側に由来が刻まれている。香川景樹は江戸期歌人で天保１４年に没す。高弟の菅沼斐雄を連れ，文政元年東下りをした時，嵩山七曲がり付近でこの歌を詠んだ。

１６２　嵩山宿脇本陣・本陣

嵩山村は，脇往還の小宿であったが，宝永４年（１７０７）の大地震によって東海道の新居・舞阪宿が大打撃を受けたことにより，姫街道の交通量が急増した。継立役の負担増に田畑の耕作もままならないようになり，吉田藩に訴えた。幕府は諸大名に対し，風雨や急病以外は通行を禁止し，以前より通行量は減少した。その後幕府は明和元年（１７６４）嵩山村等に伝馬宿次を仰せ付け，東海道と同格の宿場となった。天保年間の「大概帳」によれば本陣が１軒あったが，「本陣之儀ハ名而己ニ而，名主宅ニ有之，大通行之節ハ休泊共難相成場所ニ有之」とある。まだ脇本陣や旅籠屋はないとしている。しかし嘉永７年（１８５４）の大地震により再び新居渡海が困難となり，幕末になり通行者が増えると，脇本陣や旅籠屋が置かれるようになった。

脇本陣

脇本陣入口

本　陣

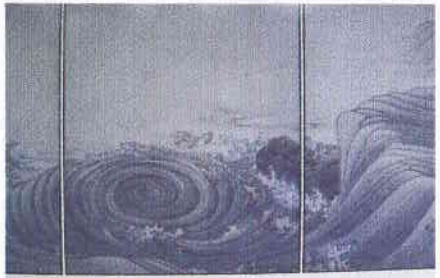
本陣の塀

現在，脇本陣の夏目家宅の石垣，門，倉など，また本陣の夏目家の塀の一部が残されている。

本陣夏目家には，本陣を含め１２軒の旅籠屋の間取り図が保存されている。
（左写真は，もと旅籠のよろず屋）

１６３　秋葉常夜灯

文政１０年（１８２７）の建立。煉瓦塀に囲まれている。竿の部分に「常夜灯」基壇部分に「村中安全」とある。今も地元の人々が交代で灯明を灯している。



波濤図（一部）

１６４　正宗寺（しょうじゅうじ）

創立は永仁年中（１２９３～１２９８）に渡来した宋僧日顔禅師によるといわれる。達磨大師に縁の深い嵩山（すうざん）の地形に似ているため，日顔はこの地を嵩山と名付け山上に寺を建てた。この寺は徳川家康の側室で秀忠の生母，西郷局（お愛の方）の実家（西郷氏）の菩提寺でもある。唐門には葵の紋があり，安政年間に再建された書院，客殿，開山堂，鐘楼などが並んでいる。

また，円山応挙，長沢芦雪，狩野正信等多くの書画がある。特に長沢芦雪の作品群は名高く，当寺は別名芦雪寺とも呼ばれている。芦雪の旧方丈障壁画（波濤図）は国指定重要文化財に指定されている。

１６５　萬福寺古墳

萬福寺周辺には奈木古墳群と呼ばれる１５基の円墳が存在する。萬福寺古墳は，直径約１２ｍ，高さ３ｍで，６世紀中頃の築造である。横穴式石室で全長８ｍ程。石室から数多くの副葬品と共に１３体余の遺骸が発見された。

嵩山市場バス停手前に新旧道分岐点があり，旧道は左折し，細い道に入る。

数十ｍ程でやや広い道を右折する。しばらく進むと新道と再び合流する。

１６６　長楽（ながら）の檜

幹回り５３９ｃｍ，高さ１２．５ｍ，枝張り１０．８ｍ×９．２ｍ，樹齢推定３００年以上。樹木の下部は落雷のため，焼けて空洞になり，先端は枯死している。まれに見る古木で，豊橋市指定天然記念物となっている。根本に地蔵があることから古来より「地蔵檜」と呼ばれている。

この檜の根本を鎌倉街道が通っていたと考えられており，檜の下に「いにしへの鎌倉道の跡所　とはにつたへよ　ひのきと地蔵」と刻まれた歌碑が建てられている。

長楽バス停近くから旧道は斜め左に入り，玉川駐在所の裏から，再び新道に合流する。

１６７　道標

街道南に延文２年（１３５７）創立と伝えられる臨済宗長楽（ちょうらくじ）寺がある。境内の東端の石仏群の中の一つに，光背に「右ごゆ道　左よし田道」と刻まれた地蔵がある。表面は風化し，現在ほとんど読めない。住職の話では，かつて寺の南方向に「堂の坂」の三叉路があり，その脇にあったという。

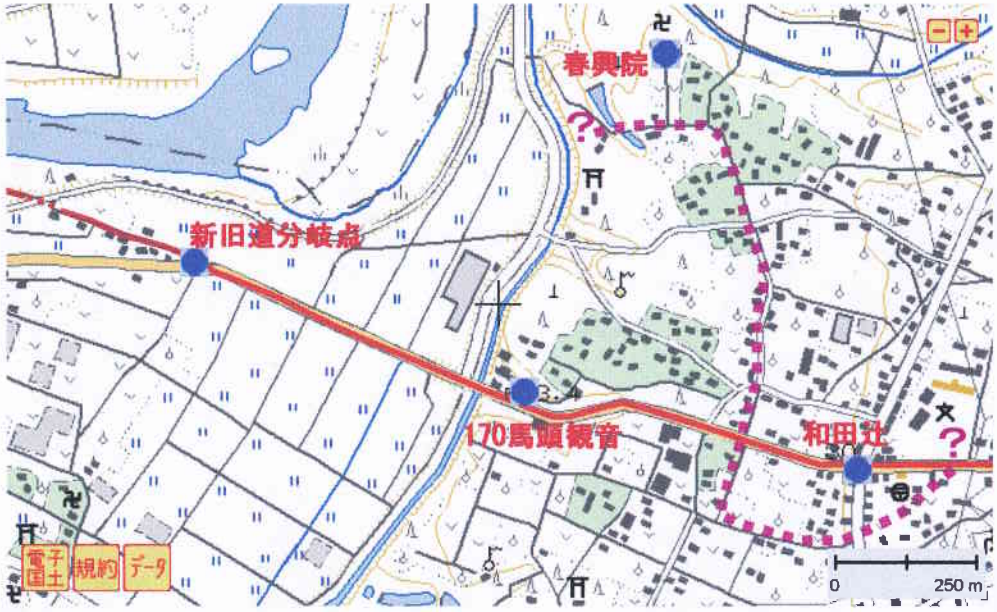
１６８　秋葉常夜灯・道標

姫街道の御油方面と吉田方面への分岐点に建つ秋葉常夜灯であり，文政３年（１８２０）の建立。

この分岐点に，自然石に「右豊川　左豊橋」と刻んだ道標がある。

１６９　長楽一里塚

江戸より７４里目の一里塚である。現在遺構は全く残っていない。吉田・御油分岐点の西方，竹林付近と思われる。「大概帳」には「木立無之　但，左右之塚共長楽村地内」とある。街道南側に，平成８年に「姫街道長楽一里塚」の石碑が建てられている。



和田の辻から西に進みカーブした坂を下っていく。神谷昌志氏によると，姫街道の旧道は，和田の辻の手前にある中学校の南側で南西に入り，別所街道を横切り，北に方向を変えて国道を横切り，春興院前を通り，当古の渡しに向かっていたという。

○　春興院

創立は永禄９年（１５６６），当時の和田郷一帯を支配した渡辺氏が開いた。参道には「不許葷酒入山門」の禁牌石がある。本堂の西の廟に渡辺氏三代の五輪塔がある。背後には一石五輪があり，寺伝によると姫街道を通行中病でこの地で生涯を終えた大名の室や息女の供養塔という。

１７０　馬頭観音・二本松の碑

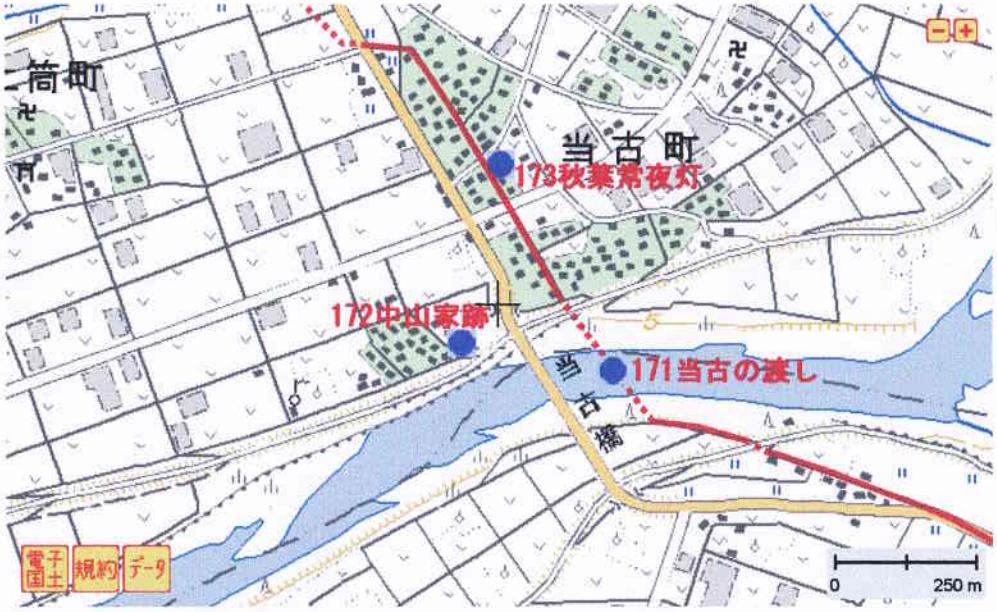
大正１２年に近隣の三ヶ日，遠州，牛久保，豊橋，嵩山等の交通運輸関係者が建立した。豊川を無事渡れるよう祈った水難除の馬頭観世音である。

その横に，上部に松の絵が描かれた石碑がある。昔ここに弁慶の首塚があり，二本の松の大木があったが，明治時代に倒れてしまい，それを惜しんで地元の有志が碑を建てたという。

台地から下って田園地帯を進み、豊川付近に至ると，新道は左にカーブする。旧道は右の細い道を直進する。しばらく進むと豊川の堤防にぶつかる

堤防の向こう側に豊川へ至る道がある。

当古の渡しがあった付近に至る。



当古から見た渡し跡

渡し跡から当古の家並へ

１７１　当古の渡し

慶長年間に当古村の旧家中山家に渡船の御用が仰せつけられてから昭和９年に鉄橋の当古橋が架けられるまで，三百数十年間，渡船が続いていた。

「大概帳」には「当古村地内吉田川有り，幅大概百間程，渡船也……右川渡船之儀，大通行有之節，領主与寄船差出渡船致す，平日は当村与船壱艘ツゝ差出，仕切之賃銭取之」とある。渡船の船賃は，原則として一人１回４文であった。中山家が渡船の特権を独占していた江戸初期から文化１３年（１８１６）までは，当古村の者でも船賃を支払わなければならなかった。

当古村は，江戸期から明治中期にかけて繁栄した。嵩山と御油の中間点としてのにぎわいがあり，豊川の増水時には旅人が当古の船宿を利用した。また，山間部と海岸部を結ぶ豊川の船運の重要な港であった。

１７２　中山家跡

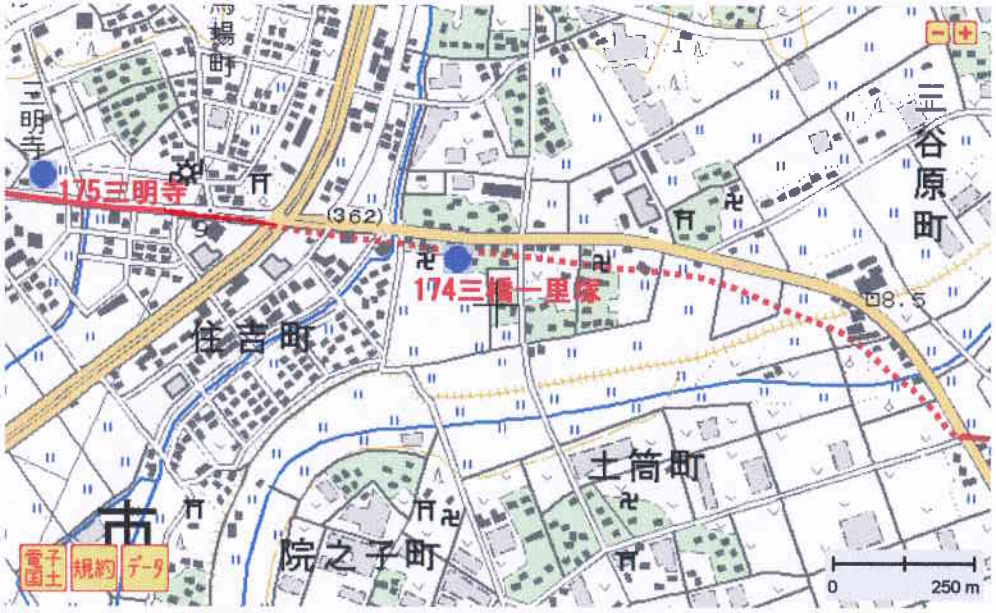
中山家は代々当古村の庄屋を勤めた。また，徳川家康が豊川の出水で立ち往生していたところ中山家の先祖が荷物運搬用の船を使って当古の渡しをした。その縁故で家康が同家に渡船の特権を与えたという。以来，安政６年（１８５８）に村に権利が移るまでの間，当古の渡しの運営にあたった。

現在，屋敷跡は公園になり，中山家の由来の石碑や屋敷の説明板が設置されている。

１７３　秋葉常夜灯

当古村のほぼ中間にある。正面に「秋葉山　常夜燈」「村中安全」，裏側に「文政二巳卯九月吉日」と刻まれている。奥には当古の船宿の人たちの信仰を集めていた秋葉社がある。

当古の家並をぬけると再び新道に出る。ここからバイパスとの交差点あたりまで，旧道は新道より南側を通っていたが，現在は残っていない。



１７４　三橋一里塚

江戸から７５里目の一里塚である。「大概帳」には「左右之塚共木立無之」とあるが，現在新道沿いの住宅の背後に一本の榎が残っている。土地の人たちは「一里塚の榎」と呼んでいる。

三明寺本堂

１７５　三明寺

曹洞宗三明寺は，寺伝によると，大宝２年（７０２）に創建され，平安時代の末に焼失したが，１４世紀末，後醍醐天皇の皇子で出家した無文禅師が再興したという。

本尊は貞観年間に三河の国司だった大江定基が力寿姫の死を悼んで彫刻した弁財天の像であると伝えられる。この弁財天は，姫街道を通る馬方を呼んで，追分節などを歌わせ，そのお礼に使いべりのしない財布を与えたといわれ，馬方弁天とも呼ばれている。本堂内に，弁財天を安置する宮殿（厨子）があり，国の重要文化財である。また，本堂前に建つ三重塔は，享禄４年（１５３１）の建立で，第一層と第二層は和様，第三層は禅宗様（唐様）で総高は約１５ｍである。国の重要文化財である。

本堂内の宮殿

三重塔

妙厳寺山門

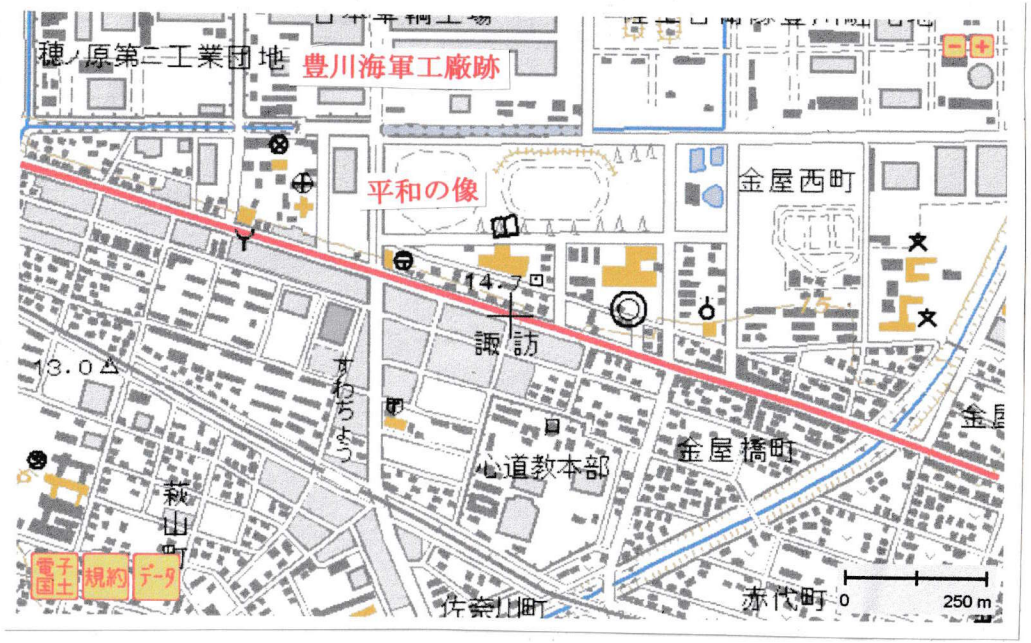
豊川稲荷大本殿

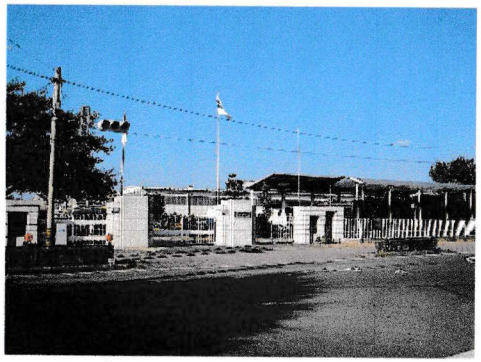
１７６　豊川稲荷

豊川稲荷は曹洞宗妙厳寺の中にある。妙厳寺は嘉吉元年（１４４１）に東海義易禅師により開創され，天文年間に今川義元が伽藍を配置し，寺領を寄進したという。山門は現建物中最古の建物である。

稲荷は，妙厳寺の鎮守である吒枳尼真天（だきにしんてん）のことで，中世以来，狐の精として信仰されていた。明暦年間には，商売繁盛，家内安全，福徳開運の神として稲荷信仰が庶民層に広まるようになった。天保年間には，門前に数軒の宿屋があり，飲食店・土産物屋などが建ち並ぶ門前町が形成されるようになったという。

現在の大本殿は，昭和５年完工の高さ３０ｍの豪壮な総けやき造りである。

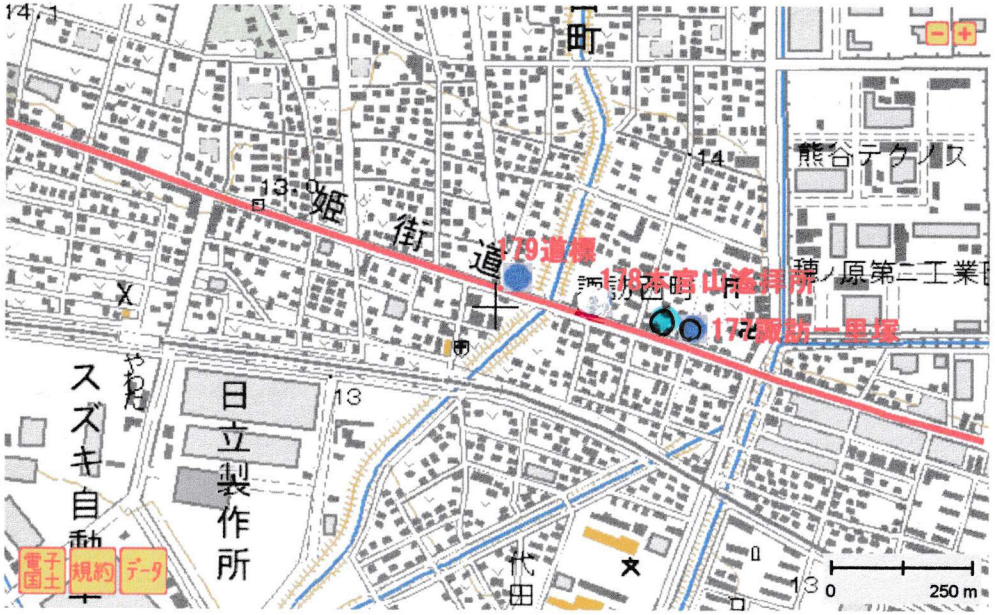


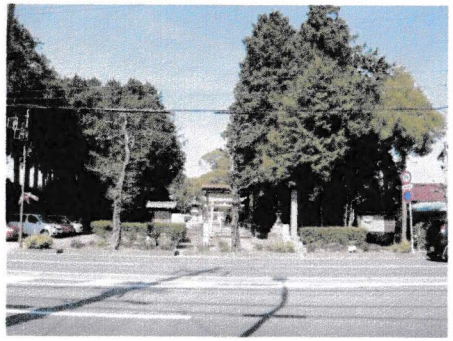

正門跡（現日本車輌製造正門）

○　豊川海軍工廠跡

豊川海軍工廠は，海軍兵器の生産を目的として昭和１３年に建設が決定し，昭和１４年１２月１５日に開庁した。機銃及び弾丸や艦船で使用する装置などを生産し，東洋一の兵器工場と言われた。職員や工員以外に徴用工員（女子挺身隊を含む）や動員学徒も多くいて，最盛期には５万人以上の人々が交代で働いていたと推定される。

昭和２０年８月７日午前１０時１３分からわずか２６分間に米軍Ｂ２９爆撃機１２４機と戦闘機による空爆により３０００発以上の爆弾が落とされて壊滅的な被害を受け，２５００名以上の人が犠牲となった。豊川稲荷裏の稲荷公園に「海軍工廠戦没者供養塔」，豊川運動公園に「平和の像」が建てられている。





諏訪神社

１７７　諏訪一里塚

諏訪神社は，祭神が建御名方神と八坂刀売神で，創建は明らかでないが，永正年間（１５０４～１５２０）市田城主が崇敬したという。

諏訪神社付近に江戸から７６里目の諏訪一里塚があったが，現在その形跡は残っていない。

１７８　本宮山遙拝所

霊峰本宮山は三河国一宮砥鹿（とが）神社の奥宮が鎮座して，大己貴命が祀られている。かつて本宮山市田遙拝所は，天保１３年（１８４２）に地元の崇敬者の寄進により石鳥居と手水舎，石灯籠が設置された。

石鳥居は太平洋戦争の爆撃で被害を受けたが，修復して砥鹿神社へ移転した。現在この場所には石碑だけが残されている。

１７９　道標

白川橋交差点に，「国内神明帳郡明神是ヨリ十五丁」と記された石柱の道標がある。ここより北に伊知多神社があり，昔はこの地に郡明神があったという。

１８０　三河国分尼寺跡

聖武天皇は天平１３年（７４１），国家の平和と繁栄を祈るために，全国６０余か国に「国分寺建立の詔」を出した。国分寺と国分尼寺は，国家仏教を広めるとともに天平文化の地方への普及に大きな役割を果たしたが，律令制度が崩れていくなかで，その維持・管理が困難となり，平安時代の末には荒廃したと思われる。国分尼寺の正式な寺名は法華滅罪之寺という。

三河国分尼寺は，諸国国分寺の金堂に匹敵する金堂基壇や複廊の回廊跡があり，寺の敷地は１５０ｍ四方，南大門・中門・金堂・講堂・尼房が並ぶ伽藍であった。三河国分尼寺は国分寺とともに大正１１年に国の史跡に指定されている。

中門と回廊の一部が奈良時代の建築様式で復元され，金堂基壇や伽藍の配置も復元されている。史跡公園として整備され，天平の里資料館がある。

中　門

回　廊

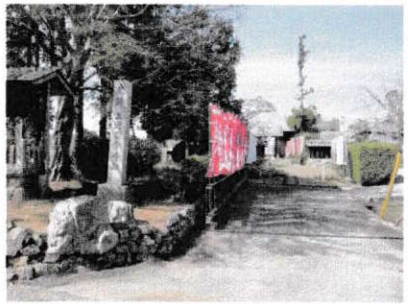
金堂礎石

１８１　三河国分寺跡

聖武天皇の「国分寺建立の詔」により，全国に建立された。国分寺の正式な寺名は金光明四天王護国之寺という。

三河国分寺は，敷地１８０ｍ四方で周囲は築地塀で囲まれていた。金堂跡地に１６世紀に再興された曹洞宗の寺院が建てられている。境内には平安時代に入ってからのものと考えられる古い銅鐘がある。８０個あった乳が欠け落ち２０数個が残るのみとなっている。国の重要文化財に指定されている。

西側の藪の中には，塔の基壇や礎石が残っており，基壇の回りは檜の角材で囲った特殊な造りであった。



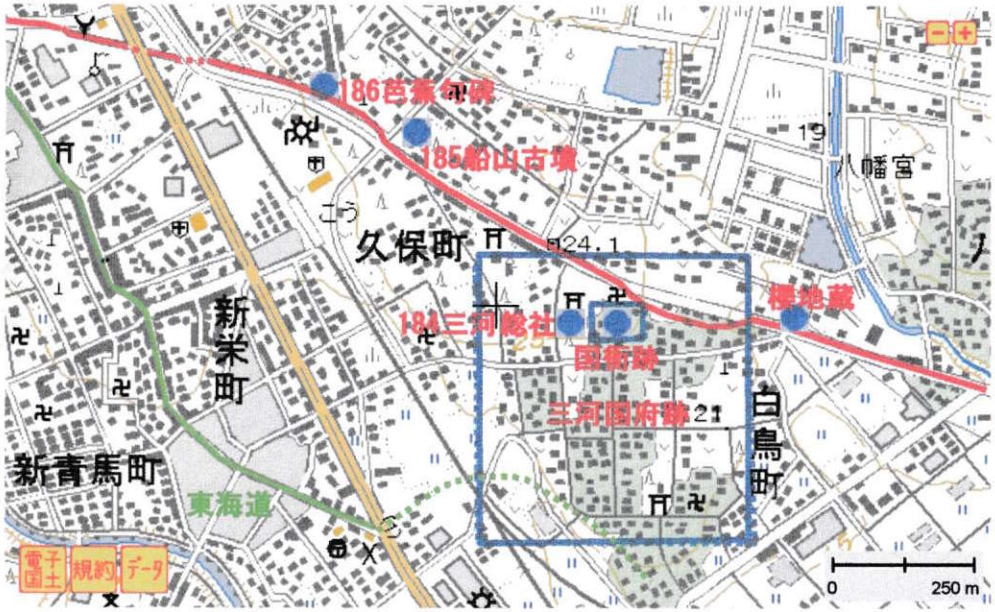
１８２　国府八幡宮

聖武天皇は豊前国宇佐八幡宮へ法華経を納め，それより朝廷は宇佐八幡宮を厚く崇拝した。諸国も国府の地に国分寺の鎮護のため八幡宮を勧請した。

三河国府八幡宮は，天武天皇の白鳳年間に勧請されたと伝えられる。奥にある本殿は，室町時代の文明９年（１４７７）の建立で，三間社流造，檜皮葺である。特に曲線を描く屋根の線が美しく，破風下を飾る彫刻も優美である。国の重要文化財に指定されている。

１８３　秋葉常夜灯

姫街道より八幡宮への参道入口左側にある。正面に「常夜燈　秋葉山　村中安全」，右面に「文化八辛未年」と刻まれている。入口右側には，「縣社八幡宮」の石柱がある。



櫻地蔵を過ぎ，旧道はコンビニエンスストアの手前を左手に入り，曹源寺手前で新道に合流する。

国衙跡の寺

上　復元した羊形硯
下　出土した羊形硯

現在の白鳥町や久保町にまたがる地域一帯は三河の国府が設置された場所とされ，現在の曹源寺付近が国衙の跡とされている。

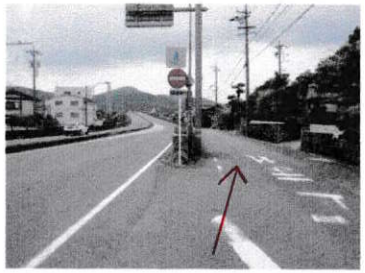
天平の里資料館に国府跡から出土した「羊形硯」がある。全国で７点しか出土していない。西域の羊をモデルにしたもので，シルクロードの文化が豊川の地まで到達したことを物語っている。

１８４　三河総社

任国に赴任した国司は，三河国一宮に参拝し，国内の神社を順拝する。毎月朔日には神社に奉幣するのが恒例である。しかし，国衙の近くに国内の神社の祭神を勧請し，これを代拝して任務を果たすようになった。この社が総社である。本殿は三間社流造で門と築地塀で囲まれている。最も古い棟札は永和４年（１３７８）。現在は地元の氏神として祀られている。

１８５　船山古墳

船山古墳は，三河最大の前方後円墳で，全長９６ｍ，後円部直径５０ｍで周濠はない。５世紀後半の古墳。直刀，鉾，多数の鉄鏃が出土し，葺き石，円筒埴輪列が確認された。埴輪棺２基も発見された。現在，前方部先端，後円部東側は削り取られ，５０ｍ余りが現存するのみである。上宿神社が祀られている。



上宿交差点の西から，旧道は右側の細い道を進む。

すぐに右側に西明寺への参道があり，その左手に芭蕉の句碑がある。

１８６　芭蕉句碑

寛保３年（１７４３）俳聖芭蕉翁５０回忌の際，国府の俳人米林下（べいりんげ）（小沢才二）が建てたもので，現在東三河にある句碑の中で一番古い。

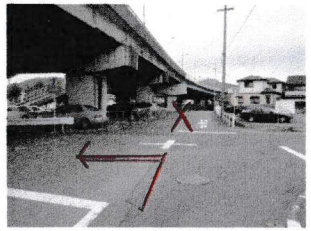
正面に「かげろふの我が肩に立紙子哉　ばせを翁」と句が刻まれている。側面には，「従是凡六丁余西名所二見別」と御油の追分を案内している。共に風化していて判読しにくい。

１８７　西明寺・ベルツ供養塔

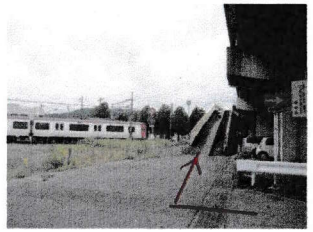
曹洞宗西明寺は，平安時代三河の国司大江定基が世をはかなみ草庵を結び，六光寺と名付けたのが始まりである。本尊の阿弥陀如来坐像は鎌倉時代の作。

境内にベルツ博士の供養塔・ベルツ家の墓誌がある。ベルツは明治９年に来日し，日本の内科医学に多大な功績を残した。博士の妻ハナは三河の生まれ。ベルツの死後，ドイツより帰国したハナは，夫ベルツと夭折した娘の菩提を弔うため，西明寺に供養塔を建立した。

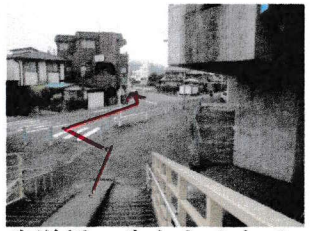
かたわらに水原秋桜子の「菊にほふ国に大医の名をとどむ」の句碑がある。



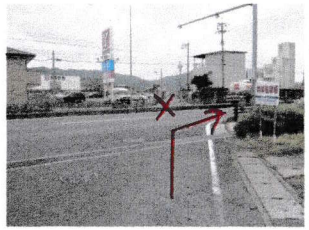
再び芭蕉句碑からゆるやかな坂（さぎ坂）を下っていくと，名鉄名古屋本線に突き当たる。手前を左折し新道の下を通って迂回する。



新道に沿った歩道橋を渡る。

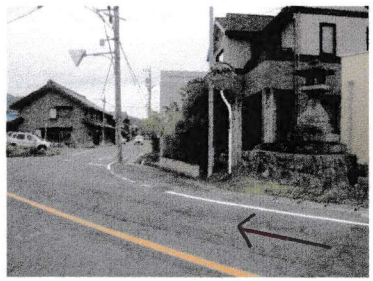


歩道橋の先ななめ左手へ進む。



国道一号線に出るが，横断できない。右手の交差点へ迂回し横断して旧道にもどる。

旧道をそのまま直進し，行力交差点を通過すると，追分である。



１８８　御油追分

東海道との合流点である。秋葉常夜灯（安永３年建立）と２本の道標がある。１つは明治十六年建立の道標で，正面に「秋葉山三尺坊大権現道」，側面に「秋葉山道一新講社中」と３人の名が刻まれている。もう１つは「国幣小社砥鹿神社道」の道標である。道路拡張工事のため，東側にあったものが西側に移転した。この分岐点は豊川稲荷や鳳来寺山，秋葉山への参詣人でにぎわい，「二見別」と通称されていた。東海道を西進すると，御油橋を越え，御油宿に入る。合流点より東には，東海道の御油一里塚跡がある。